
桜の花の咲く頃

太美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の花の咲く頃

【Nコード】

N8841D

【作者名】

太美

【あらすじ】

携帯のないあの頃。自分の気持ちになかなか気づかずにした私。まわりの友達に支えられながら、彼との距離を近づけていく。せっかく仲良くなれたのに、卒業という人生の門出を向かえ、思い出を胸にやっと素直になれた私。

懐かしきあの頃に・・・

むかしむかし、携帯電話も無かった頃のお話。

彼に始めて逢ったのは、中学3年生の時だった。

彼は生徒会長をしている、成績優秀で背の高い男の子。

私はちよつと足の速い女の子。

お互いが意識し始めたのが、夏休み前の最期の引退試合近い頃だった。

私は陸上部に在籍、毎日グラウンドを走ってた。

彼は、サッカー部に在籍。サッカー部で生徒会長となるとかなり目立つと思うが、素朴な彼の性格と人柄で、どちらかというとおとなしいタイプの男の子だった。

私は引退試合にスカウトが来る！という話を顧問から聞いてたので、かなり練習に力を入れた。

私の弱点のスタートダッシュを集中練習。サッカー部と野球部が引き上げるとグラウンドはかなり広く使える。そこから本格的な練習開始だった。

私の専門は短距離。中学校のグラウンドにあるトラックは200mしかなく、コーナーもきつい。その日は何度も何度も、ダッシュしてタイムを計測してた。

マネージャーの杏子ちゃんきょうしちゃんがタイムをとる。

「ゆみちゃん、今の今日のベスト！どうする？もうやめる？」

「ごめん！せつかくだからあと1本だけ・・・」

いつも、杏子ちゃんには無理を言ってる。それでも、彼女は笑顔で答えてくれる。

もちろん、理由は私じゃない。杏子ちゃんには彼がいる。サッカー部の彼。いつも私の付き合いをしてくれた後、急いで着替えて彼と

一緒に帰っていく。杏子ちゃんの彼は着替えた後、グランドの隅っこにある“待ち合わせの樹”と言われる場所で待ってる。もちろん、グランドからはよく見える。今日もすでに、杏子ちゃんの彼が現れてる。でも、今日はもう一人いた。そんな事はお構いなしに私は走る。

心の中で、杏子ちゃんに謝りながら………

「ゆみちゃん、さらに記録更新！今日は調子いいね！」

「杏子ちゃん、ありがと！今日はもう終わるよ。後片付けしとくから、行つていいよ。」

「えっ、でも……ありがと。じゃ行くね。」

「バイバイ」

「バイバイ」

私は一人でグランドを均して、部室に戻り制服に着替えて帰った。

あの日から、数日続けて杏子ちゃんの彼ともう一人の影が私の練習の終わるのを待っていた。

やっぱり気になる。待ってるのは同じクラスの清水君しみずだった。

まさか、杏子ちゃんと河野君くわのとで三角関係？？？

恋愛に疎い私でも気になって、思い切つて聞いてみた。

「杏子ちゃん、河野君が待ってるのはわかるんだけど、どうして清水君までいてるの？」

「あっ、やっぱり気がついた？」

「いや、普通つくでしょ。まさか、三角関係とかつたりして！」

杏子ちゃんモテルね！」

杏子ちゃんは曖昧な返事を残して帰っていった。

引退試合が近づいてくる。相変わらず、杏子ちゃんを河野君と清水君が待ってた。

気にはなるものの、今は試合の事で頭が一杯になってる。すっかり、忘れてた。

引退試合はサッカー部のほうが先にあり、マネージャーなはずなのに、杏子ちゃんは彼の応援に行ってしまった。今日は顧問と練習。土曜の午後だから時間が長い。

杏子ちゃんがいたら、きつい練習も平気だけど今日は正直しんどい。練習の後に顧問から言われた。

「佐々木、嶋野高校はリレームメンバーが欲しいって言ってたぞ。渡わたりは公立だから、高校になったら寂しいな。」

杏子ちゃんはやっぱ公立なんだ。私は私立。離れ離れ、と言う事は、毎日練習がきつく感じるんだろな……。そんな事を考えながら、グラウンドを均してた。ふと視線を上げると、待ち合わせの樹に3人が待ってた。杏子ちゃん達だ。

「ゆみちゃ〜んっ!」

杏子ちゃんが満面の笑みで駆け寄ってきた。その後を河野君が追いかけてきた。

3人で話していると、どうやらサッカー部は敗退したらしい。これで引退。受験勉強の日々がやってくると彼の河野君は笑って言った。そして急に河野君は真面目な顔になって話題を変えた。

なんでも、清水君から話があるらしい。彼はPKでゴールをはずして落ち込んでいるらしい。以前から河野君には話してたそうだが、試合の結果次第で自分に決断を下すらしい。それがどうやら今日のようで、かなり悩んで出した結果らしい。真面目に聞いてきて、と言われ待ち合わせの樹まで走っていった。正直、清水君の決断を聞かされたからってどうなんだ?という思いが強かった。

「清水君、どうしたの?」

「僕はいまから、決意表明をする!」

「はい。」

「佐々木、勝負をしよう!僕が勝ったら僕の言う事を聞いて欲しい!」

「私が勝ったらどうするの?」

「……………僕の好きな人を教える。口外しようが自由だ!100

mで勝負だ！」

その頃は、誰が誰の事が好きらしいという噂で盛り上がった。もちろん、テレビでアイドルと言われる人たちの話題もあるが、徐々にテレビを悠長に見れる時間が限られてくる。自ずと受験勉強に励むしかない。

受験を地獄と感じてる多感な時期。唯一の気晴らしはその程度の話題しかなかった。

でも、以前から生徒会の中では好きな子を発表しあうという伝統があるらしい。

いざとなれば、河野君も生徒会。彼に聞いたら判明することだし、命令を聞くにしても中学生の考える事だと、たかが知れてる。という事で、私は快諾した。まだ顧問が残っててかなりの興味を示した様子で、判定はしてやるということらしい。

正直、今は早く家に帰ってゆつくりしたい気分なのに……清水君が着替えてる間に着々と意味不明なレースの準備が整っている。

彼の準備が整ったので、いざ勝負する事に。スターターは杏子ちゃん、判定は顧問だった。

位置について……用意……ピストルの音と共に走り出した。彼の頭の中では、どうやら女子には負けない、大差で勝つつもりだったらしい。

結果は、なんと同着。私的には命令は聞かなくても情報はきつと手に入る。彼にしたら、想定外の出来事だったらしく言葉も出ない。

「佐々木、速いな……」

「ゆみちゃんは嶋野高校に推薦きまつてるんだよ！知らなかった？」

「渡、それを先に言ってくれよ！」

この日は珍しく4人で一緒に帰った。

久しぶりに笑いながら帰った気がする。毎日毎日練習して、試合の日には高校側が提示した記録を破らないといけない。そんなプレッシャーに押しつぶされそうになってた。心から笑って、ストレスを

発散できた気がした。

その日以来毎日4人で帰る日が続いた。

河野君と清水君は図書室で勉強して私達を待っていてくれた。

相変わらず、帰り道の話題はどうでもいい事。どうでもいい事なのに、むきなったり、大声で笑ったり時には言い争ったり・・・言い争っても、またすぐに話題が変わり笑いあって・・・

そんな時に、急に私の引退試合に応援に来る事が決まった。私としては、出来るだけそつとして欲しかった。応援に来てくれるのは嬉しいが、個人的には愛想を振りまく余裕もない。制限タイムを切つて、嶋野高校のリレーメンバーに入る事だけを考えてかった。今思えば、彼らだって受験勉強で忙しい中せつかく来てくれるのに、すぐく素っ気ない返事をしてしまった。私の気持ちを察したのか、杏子ちゃんがその場を和ませた。結局彼らは来るらしい。彼らの言いつ分は、受験生にだって息抜きは必要だ！だった。もちろん、私たちにとっては初めての受験。右も左もわからぬまま、進路を決めその道に向かって進むしかない。いわば大人の階段を本当の意味で上る感覚だった。

ついに試合当日、エントリーは200m。

私は、100mすぎのコーナーから直線に向かって走る、道が一気に開ける感じが大好き。

コーナーを走ってる時は、周りの人が気になるけど直線に入った瞬間、開放感である。私だけのレーン、そのレーンをただひたすら走る。距離が200mなので一瞬にして終わる。

ついに召集が始まった。アップをすませ、召集所に集まる選手達。予選は人数が多いので着順だった。各組上位2名。4組あるので2位までに入ると決勝に出れる。もちろん、決勝までに残らないといけないが、私には制限タイムを切らないといけない。もちろん、楽に切れるタイムを提示してこなかった。

ふと視線をスタンドに向けると河野君と清水君がいてる。今日は私

服、普段は制服しか見たことが無いからすごく不思議な感じだった。そんな事を考えてると、制限タイムの事も忘れリラックスできた。そしていよいよ予選開始。私は2組目の4コース。1組目のピストル音に合わせてスタートの練習。やっぱり微妙に遅れる。そんな焦りをよそに、2組のスタートとなった。

「位置について 用意・・・」

ピストルの音に反応して走り出す。

私も上位2着に入るために懸命にはしった。コーナーを抜けると一気に広がる視界。私の大好きな瞬間。気持ちいいと感じてる間にゴールしていた。結果は1位で予選突破。気になるタイムは及ばなかったが、あと1本走れる。チャンスはまだ残ってた。ゴール付近にいた顧問の所に行く。

「佐々木、今のスタート良かったぞ！あの調子で決勝走ってみろ！」
気持ちが少し軽くなった。

軽くなったついでに、ギャラリーにも挨拶に行って結果を報告してこようと思った。

「ゆみちゃん、よかったね。決勝だね！がんばって」

スタンドに行く階段の所で杏子ちゃんに逢った。杏子ちゃんもギャラリーに結果報告に急いで行く所だった。二人で階段を駆け上り、彼らの待つスタンドへ。二人とも決勝に行くと伝えると驚いてた。団体競技と個人競技の違いを目の当たりにして言葉もない。ようやく河野君が言った。

「すごいな、佐々木。自分ひとりの力だろ。俺らは11人で勝てるけど、お前一人だけだもんな。」

「ま、私は協調性がないから一人がいいのかもね。」
すると杏子ちゃんが

「本当だよ！ゆみちゃん、協調性ないもん！」

いつも、彼女は空気を和ませてくれる。私の気持ちまでやわらかくしてくれる大事な友達だった。

「じゃ、決勝に向けて準備してくるよ。」

私はそういい残してスタンドを後にした。

あと1本で私の進路が決まる。一応内定は出てるけど、向こうの希望通りのタイムが出ないと取り消し。一般入試と同じ扱いになる。走る練習をしながら、受験勉強の両立になる。引退試合とは言うものの、私にしてみればこれが受験。制限タイムは予選のタイムよりも0.5秒早い。これはスタートダッシュで決まる。あとは苦手なところを克服するだけ、本当に自分との戦いになった。

決勝でも4コースを走る事になった。と言う事は、予選の中で一番タイムがよかったみたい。スタートに神経を集中させた。

役員の合図と同時に、ブロックを蹴りだして走り出す。今度はぴつたり合った！私は無我夢中で走る。

制限タイムを切るために……

私はゴールテープをきる。1位だった。タイムは制限タイムを余裕で切るタイムが出た。もちろん自己ベスト！これには顧問も杏子ちゃんも大喜び。

役員事務所には嶋野高校の監督が見に来てた。顧問と二人で挨拶に行く。

「佐々木です。これからもよろしくお願いします。」

相手は微笑むと顧問と奥に入っていた。何でもこれからの練習メニューの相談らしい。私はその場を後に、ギャラリーに報告に行こうとスタンドに向かった。

河野君の姿はなく、清水君が待ってた。

「あれ？河野君は？」

「渡と帰ったよ。おめでとう、1位だね。」

「ありがとう。」

「今日は二人だけど、帰ろっか？」

私は急いで着替えに行った。途中顧問に会って明日からの事を聞いた。なんでも、高校の監督からはメニューを渡され受験後には高校の練習に参加するらしい。それまでの間は筋力を落とさないように注意されたいらしい。現状は一応引退だけど、練習は後輩達に混じっ

て特別メニューを組んでくれるらしい。

冬休みには、合宿というものにも参加するらしい。不安と期待を胸にその場を去った。

競技場からはバスに乗って帰る。清水君はバス停で待っていてくれた。二人つきりで話したのは初めてだった。いつも杏子ちゃんと河野君が盛り上げ役で、私たちは笑ってた。だから最初は会話が続かない、ぎこちない状態でバスに座ってた。

「佐々木は今日の結果でどうなるの？」

「多分、嶋野高校に決まると思うよ。」

「それって、推薦が決まったって事？」

「そうだね・・・多分。」

でも受験もするんだよ。だからまだわかんないけどね・・・少し話しては沈黙、また話しては沈黙だった。

やっと近所のバス停に到着、バスを降りて歩き出すと角の駄菓子屋で杏子ちゃん達が待ってた。

駄菓子屋の裏にある公園で、ジュースを片手に話した。夏休み前なので、休みの間の勉強計画や生徒会の活動の事、文化祭と話題は尽きなかった。なんでも、生徒会は文化祭が終わってやっと任務が終わるらしい。ジュースが飲み終わるまでの楽しい時間だった。

家に帰ると、お母さんが台所から走ってきた。

「ゆみ、結果はどうだったの？」

「一応、制限タイムはきったよ。嶋野高校の監督にもあったよ。」

「よかったね。早く手を洗っておいで。すぐ晩ご飯だから。」
そっぴい残して台所に戻った。

我が家はすごく平凡な家庭。サラリーマンの父親に専業主婦の母、そして大学に通う兄の4人家族。兄とは年も離れてるのでけんかにならない。妹に対してもどこか冷めたものの言い方をする。それでも妹の事は大事にしてくれて、勉強を教えてくれる。兄なのに、家

庭教師もしてくれると母は大喜びだった。夕食の後に、私のこれらについて話した。冬休みには合宿に参加する事、先輩に混じって特別メニューがあること。そんな話を聞きながら、お兄ちゃんは言った。

「よし、じゃあ勉強の面倒はみてやるよ。気にせず練習に取り組みなよ。」

「ありがとう、お兄ちゃん！！！！」

「その代わり、報酬はいただくぞ！」

笑いながら部屋に戻った。

数日後には終業式がまっている。受験生の地獄の夏休み。一応勉強しておかなくっちゃ……

終業式には、成績表が渡される。この成績次第で進路が決まるらしい。成績のあまり良くない生徒には補習もあるらしい。補習を受けたくないの、遅いとわかってながらも勉強をしておく。

推薦が決まったとはいえ、あくまでも仮で受験の成績次第ではわからないと顧問には念を押されてる。

そして、ついに終業式。成績表をもらった。

これで、夏休み！受験生には猛勉強の日々。私は練習と勉強の両立が待っていた。

冬の合宿から参加と言われてたのに、夏の合宿にも参加となった。

もちろん、合宿だけでなく普段の練習も高校で行われるものには参加させられた。そんなに年は離れてないのに、みんながすぐ大人に見えた。中学生も私だけじゃなく、いろんな地域の子が来ていた。同じ年の子同士、仲良くなるのには時間はかからなかった。今まででは経験した事のない練習量や、本格的な施設にも驚いた。

違う世界に触れて、私は大人になった気がした。世界が変わった気がした。

まだ中学生の子供なのに、大人のような感じだった。

夏休みがあげ、大人になったつもりの私は、みんなの輪の中に入ると普通の中学生だった。

相変わらず話題は、誰と誰が夏休みの間に付き合ったのだの、誰は誰の事が好きと言うもの。杏子ちゃんと、夏休み前に勝負した清水君の好きな子は誰だ？と言う事になり調査する事になった。名前をすぐ聞くと面白くないので、ヒントを小出しにもらう事に決まった。決まったのはいいが、誰に聞くかで迷った。まさか本人には聞けないし・・・そこで、生徒会の伝統に倣うと生徒会の人なら知ってる。じゃあ、河野君に確認しようと思り上がった。その話を横で聞いてた美佳^{みか}が話しに入ってきた。

「私も清水君の好きな子知りたい！」

話を聞くと、彼女は2年の時から清水君と同じクラスらしい。さらに詳しく聞くと彼女は清水君のことが好きと言う事を無理やり白状した。俄然私と杏子ちゃんは盛り上がった。

河野君に話を聞くのは杏子ちゃんの役目になり、私達は放課後の教室で待った。

ヒントが手に入って、杏子ちゃんの言うには

- ・ 髪の毛は肩まで
- ・ よく笑う
- ・ 身長は杏子ちゃんより10cmくらい高い
- ・ 同じクラス

この4つだった。当てはまるのがちょうど、私と美佳だった。美佳はまるで自分の事を清水君が好きだと思いつ込んでる。私達はきっとそうだと勝手に決めた。なんでも、2年の時に忘れ物を美佳の家まで届けにきたらしい。その時にすごく礼儀正しく美佳のお母さんに挨拶をして、お母さんも公認だったらしい。冷静に考えれば、それは美佳の片思いなはずなのに、その頃から一途。片思いにも年季が入ってる。それでおもしろ半分、美佳は清水君とお似合いだとか盛り上がった。その日以降、清水君が美佳に話しかけたりすると私

と杏子ちゃんに興味津々だった。もちろん、冷やかしたりもした。そんな時、美佳は口では怒ってたけど、表情は緩みっぱなしだった。

そんなある日の昼休み、違うクラスの友達さおりの佐織に図書室に呼ばれた。行ってみると、いつに無く真剣な顔で話し出した。私のクラスの人気者の吉川君よしかわが好きで手紙を渡して欲しいとの事だった。佐織が吉川君の事を好きなのは以外だったけど、同じ部活だったから直接渡すのは恥ずかしいらしい。自分で渡したほうがいいのと思いつつ、何故私なんだろう？とも思い佐織に聞いてみた。その答えが、なんでも吉川君に興味がなさそうという事だった。もちろん、別に興味はなかったけど、そんなに態度にでたのかな？結構吉川君とも仲良くて、わいわい騒いでたはずなのに……

とにかく、佐織から手紙を受け取って渡すと約束した。佐織は笑顔で図書室から出て行った。

さて、どうしよう。いつまでも持つてるわけにも行かない。その日の放課後にも渡そうと思い、机の中に入れておいた。ホームルームが終わり、吉川君が教室から出る時後から追いかけた。教室を出て、階段を下りて校門前でやっと追いついた。

「吉川君！」

呼び止めて、佐織から預かった手紙を渡した。もちろん、周りにはライバルらしき女の子が本当に刺さるんじゃないかって位怖い視線で見てる。私からって誤解されるのも面倒だったから

「これ預かったよ。読んであげてね。」

と彼の手の中に、佐織の気持ちのこもった手紙を押し込んで教室に戻ろうと振り返った。振り返った時に顔面蒼白の清水君が立ってた。私には彼の気持ちなんてわからなかった。なんでそんな顔してるんだろ？位にしか思わなかった。そんな清水君を残して、私は慌てて鞆を取りに教室に戻った。ちょうど佐織が廊下を歩いてたので、今渡してきたと伝えた。佐織は顔を真っ赤にして大喜びだった。何度も何度もありがとうと言ってその場を立ち去った。今日は練習に行

かなくともいい日だったので、杏子ちゃんと帰る約束をしてた。今日は河野君は用事があつて先に帰るらしい。でも、駄菓子屋の裏の公園で待ち合わせをしてるらしかった。帰る道々、佐織があんなにお礼を言ってるのを不思議に思つてた杏子ちゃんが聞いてきた。

「佐織ちゃんはどうして、あんなにゆみちゃんにお礼を言つてたの？」

佐織は吉川君が好きみたいで、手紙を渡して欲しいと頼まれたから渡した。渡した後に振り返つたら、顔面蒼白の清水君にも会つた事も話した。話し終える頃に、ちょうど河野君も公園に来た。今日は3人でジューズ片手に話した。もつぱら、清水君の話題。何故顔面蒼白なのかわからない！という私の疑問に杏子ちゃんと河野君は答えにくそうにしてた。それでも追求していくとついに杏子ちゃんが聞いた。

「清水君の好きな人つて誰？」

河野君は困り果てた顔でこう答えた。

「誰だと思う？」

杏子ちゃんは答える代わりに私を指差した。すると河野君は無言でうなずいた。

それで、納得がいった。勝負を挑んだ時は告白するつもりで、勝つたら近所の海に呼び出して告白する予定だったらしい。でも予定外に私の走りが速く、予定が崩されて告白の機械を伺つてたらしい。だから、引退試合も最期まで待つてたらしい。本当はその時に再度告白にチャレンジするつもりで、わざわざ杏子ちゃんと河野君は先に帰つて、この公園で待つてたらしい。でも、結局タイミングがつかめずに告白ができず二人に合流。と言う事は、杏子ちゃんは大分前から薄々気づいてたらしい。杏子ちゃんは私が練習に忙しいからあえて自分からは話さなかつたらしい。正直なところ、驚いた。共通点って何もない私と清水君。いったい私のどこがいいの？趣味悪いよ！と思わず口にしてしまった。

「じゃあ、佐々木の好きなタイプの男つてどんな奴？」

河野君に聞かれて改めて考えると、以外に思い当たる事がない。いいて言えば、頭のいい人。勉強が出来るだけじゃなく、いろんな世界というか、物の見方が出来る人が良かった。簡単に言えば、自分のお兄ちゃんみたいな感じ。飄々としてるけど、いろいろ教えてくれる。ちよつと大人な感じ。中学生からみたら、大学のお兄ちゃんはその大人に見える。そんなところに憧れてた。だからといって、別にブラコンではない。そんな話をすると、河野君は清水君はぴったりだと言い出した。どこがどうぴったりなのかわからない。考えると、意外と清水君の事を生徒会長くらいしか知らなかった。一緒に帰ってたけど、話題は杏子ちゃんと河野君が中心。私たちはただ笑ってるだけだった。もしかして、間違いじゃないの？と何度か河野君に聞いた。でも、真剣な顔で言われた。

「きつと、あいつ落ち込んでるよ。以外に繊細なんだ。」

でも、私はただ、預かった手紙を渡したただけであつて、私の手紙じゃない。もちろん、渡す時には預かったとも言った。それなのに、落ち込んでるってどういうこと？でも、本当に落ち込んでるかどうかはわからないし、私は半信半疑だった。それでも河野君は落ち込んでると言い張る。何故そんなに言い張るのか、理由はなんだと問い詰めた。河野君によると、勝負を挑むあたりから私の話題ばかりだったらしい。そんな事言われても、私は本当に清水君の事は知らないんだと思った。結局、どうしようという事になり私が清水君に電話する事になった。私は断固反対。できれば、河野君から電話して誤解を解いてもらった方がありがたい、というか、自然だと言いつ張った。だって、勇気を出して電話したとしても落ち込んでないと言われたらたまったもんじゃない。私は譲らなかった。最終的には、杏子ちゃんが2日ほど様子を見て、落ち込んでるようだったら電話する事になった。落ち込み度の判定は河野君と杏子ちゃん。私としては、落ち込んでませんようにと心の底から祈るだけだった。私は普段どおりに過ごした。明らかに、清水君の様子がおかしい。やっぱり、元気がない。そんな様子に美佳が気づいた。

「急に清水君の元気が無くなったと思わない？」

と私と杏子ちゃんに聞いてくる。理由は薄々わかってるけど、私が原因とは口が裂けても言えない。美佳にさんざん煽った挙句、清水君の好きな人は美佳じゃないって言えない。もちろん、美佳はもう彼女気取りで事あるごとに話しかけに行く。

「今はそつとしいたほうがいいんじゃない？」

生徒会とか忙しいんじゃないの？」

「そつか、じゃあ、励ましてきてあげなきゃっ！」

杏子ちゃんと顔を見合わせた。その瞬間清水君の声が響いた。

「うるさいよ………そつとしてくれよ………」

今まで聞いたこともない口調だった。美佳も驚いて言葉もでない。

あまりにも驚きすぎて、目にはうつすら涙まで浮かべてる。涙があふれる前に、美佳は教室から走り去った。

「清水君、なんてこと言うのよ！美佳だって心配してるのに……」

「誰かの声が聞こえた。」

私たちは声の主を確認もせずこっそり教室を出た。

待ち合わせの樹までくると杏子ちゃんがつぶやいた。

「こりゃ、重症だね。ゆみちゃん、電話だよ、決定だね。」

「ええ……つ、やだよ。恥ずかしいもん。」

「荒れてるんだもん、とにかくゆみちゃんの気持ちはどうであれ、手紙はゆみちゃんからじゃないって事は言わないとダメなんじゃないかな………」

「………」

「ねっ、このままじゃ可哀想だよ。もし、受験に失敗したらどうする？」

「そんなあ………」

二人だけで話してるつもりが、私たちの後ろには美佳がいた。目から涙があふれてても気にせず、無表情のまま立って聞いていた。

「ちよつと、今の話はどういうこと？二人はさんざん、清水君が私のこと好きとかって言ってたじゃないの。ちゃんと納得いくように

話して。」

「話すも何も・・・別に何でもないよ。」

「嘘。今話してるの聞いちゃったんだから・・・。」

「じゃ、別に理解したから怒ってるんじゃないの？行こう、杏子ちゃん。」

「まって、逃げないでよ。ちゃんと話しなさいよ。」

人の話を盗み聞きしてたのに、開き直りは怖い。しかも、女の嫉妬つき。これは手に負えないと思って、逃げるが勝ち。その場を杏子ちゃんと去ろうとした時、ふいに美佳の手が杏子ちゃんの腕をつかんだ。

「待ちなさいよ。ゆみが話してくれないなら、杏子ちゃんが話してよ。」

「行こう、杏子ちゃん。」

「美佳、痛いよ。放してよ。」

美佳は杏子ちゃんの腕をさらに力を込めて引つ張る。その力に負けて、杏子ちゃんは倒れそうになる。私はどうすることも出来なかった。

「痛いよ、わかった、ちゃんと話すから・・・。」

美佳は杏子ちゃんの腕を放さなかった。杏子ちゃんは渋々口を開いた。

「清水君の好きな子は美佳じゃないみたい。」

その言葉を聞いて、美佳の手は杏子ちゃんから放れた。力が抜けた状態で、今にも肩から外れそうな感じでぶら下がってる。

「私たちも最近わかったの。美佳に話さなきゃって思いながら、タイミングがつかめなくて。」

「ごめんね。」

「ゆみちゃん、行こう。」

その場を去ろうとする私たちに、低い美佳の声が聞こえた。

「誰なの？」

「何が？」

「清水君の好きな子は、誰なの？」

「どうして？」

「だって、タイミングがつかめなかったんでしょ。今ならいいじゃない。誰なのか教えなさいよ。」

杏子ちゃんは黙って私を指差した。美佳は黙って、指された私を見た。相変わらず、無表情だったけど、なんだか怒りを押し殺してるような感じだった。

その日を境に美佳の態度が変わった。もちろん、私にだけあからさまに態度を変えてきた。ほかの誰も気づかないように……清水君にも電話をかけそびれて、何故か私自身も少しへこんでた。授業中も電話しなきゃ……とか、美佳のことえを考えてた。そんな時に先生に質問された。

「佐々木さん、考え事もいいんだけど、今は授業に集中してもらえるかしら？」

教室は笑いで包まれた。そんな中、美佳の声が聞こえた。

「推薦決まったからって、調子に乗って……」

美佳の席は私の斜め後ろ。空耳かなと思って、授業に集中した。

お弁当を食べる時に、さっきの空耳が空耳じゃなく、はっきり私に向かって言われた言葉だつてわかった。いつもは、美佳や杏子ちゃんたちとお弁当を囲むのに、今日に限って嫌味をよく言う。

「いいよねえっ、脚が速いってだけで、高校に合格できる人もいるんだから……」

「美佳、それはゆみちゃんに失礼だよ。」

杏子ちゃんがフォローしてくれる。杏子ちゃんは今までのことを判ってくれてるから、私の気持ち^{ふゆみ}が救われる。それでも、美佳の攻撃は収まらない。そんな時に、冬実^{ふゆみ}が割って入った。

「美佳、うるさいよ。お弁当がまずくなる。」

冬実はいつも冷静沈着、成績優秀でいつも冷めた感じがしてた。冬実の一言でその場は納まり、無言のままお弁当を食べた。午後も授業があつたけど、どうも納得がいかない。別にずるして高校に推薦

が決まったわけじゃないし、私なりに努力もした。それなのに、美佳にあんなに言われなくつても・・・という思いが抑え切れなかった。このままじゃ、何するかわからないと思って、早退することにした。放課後に練習もあつたけど、今はそれと頃じゃない。こんな気持ちで練習しても身にならない。グラウンドを走つてると、また美佳に見つかつて何言われるかと思うとぞっとする。杏子ちゃんにだけは伝えたかつたけど、近くには美佳がいた。仕方なしに黙つて歸つていった。

こんなに早く家に歸つても、心配かけるだけだし。かといって、どこかに出かけるお金も持つてなかった。仕方なしに駄菓子屋の裏の公園でブランコに乗った。何も考えずに、ブランコに乗つて地面を蹴る。蹴れば蹴るほど、ブランコは勢い良く空に近づく。どれくらい夢中でこいでたんだろう？ ゆっくりブランコを止めて空を見上げた。

「逃げたでしよっ!」

振り返ると冬実がいた。

「えっ?」

「美佳から逃げたでしょう?」

心の中がみえるのか?と思うくらい驚いた。驚きが顔に出てしまった。

「そんなに驚かなくつても。見てればわかるよ。美佳が急に変わつて、ゆみに八つ当たりしてるんだもん。」

「わかる?」

「だって、塾でも最悪。悪口言いまくりだつて。」

「悪口つてだれの?」

「もちろん、ゆみの。美佳と同じ塾に行つてる子が言つてたよ。」

「えっ。何て言つてるの?」

「性格悪い、頭悪いから走るだけで合格した、顔がかわいくない・・・そんな所かな。」

「なんじゃ、そりゃっ!」

冬実の友達曰く、急に聞かれもしないのに私の事をとやかく言ってるらしい。しかも、清水君が私のどこが良くって好きなんだろ、とか言った拳句に、私のほうが絶対お似合いなのという事らしい。

「最期には付き合ってるだって。すごいね。女の嫉妬って。」

私は驚いた。という事は、美佳の塾に通ってる子達はみんな、私と清水君が付き合ってるって思ってる。しかも、勝手に清水君の好きな相手を言ってる。なんだか、腹立たしい気持ちであふれた。美佳に対する怒り、清水君に対する罪悪感。

「どうしたらいいのかな？」

正直、何をどうしたらいいか全くわからない。

「ゆみの正直な気持ちをぶつけられ？」

「えっ、誰に？美佳？」

「違うよ、清水君にだよ。」

何で、清水君に気持ちをぶつけるのかわからない。私が怒ってるのは美佳に対して。直接言いたい事があつたら言えればいいのに、影でこそこそ言われるのは好きじゃない。なんだか、卑怯な気がする。

急に冬実が清水君に気持ちを言うのも理解できない。私的には気持ち以前の問題で、手紙を渡した誤解を解かなくっちゃという模索中なだけなのに。いっそのこと、冬実ならなにかいいアドバイスでもくれるかもと思って聞いてみた。

「何で清水君なの？美佳じゃなくって？」

冬実は話し出した。さすが冷静に見てるだけある。冬実曰く、嫌いな相手だったら付き合ってるという話が出たら、その場で即否定する。でも私は否定どころか、何も言わない。拳句罪悪感まで感じてた。冬実は罪悪感はどうしてくるの？と聞く。私にもわからないと答えると、それは気になってる証拠だよと笑いながら言う。何にも思っただけなら、美佳に対する怒りだけが感情としてこみ上げる。私は怒りよりも罪悪感が強かった。どうやら、顔に出てたみたいでそこで冬実はぴんときたらしい。そこまで解ってくれてるなら思い切っている話した。夏休み前に勝負を挑まれた事、試合に応

援に来てくれた事、杏子ちゃん達と一緒に帰ってこの公園でいろいろ話した事、私の推薦の事、吉川君に頼まれて手紙を渡したら清水君が誤解してる事、その後ひどく落ち込んでる事や美佳にばれた事それから美佳の八つ当たりみたいなのが始まった事。全部を冬実には黙って聞いてくれた。

「それは、清水君誤解してるね。ゆみも自分の気持ちを気づいてないけど。とりあえず、清水君に手紙の事はちゃんと話したほうがいいね。それからじゃない、きつとゆみが自分の気持ちに気づくのは。」

そう言って、冬実はブランコを漕ぎ出した。

二人で無言でブランコに乗った。

「ちよつと、冬実はどうしてここにいるの？午後の授業は？」

「何言ってるの？ゆみだってさぼってるじゃない！」

「でも……」

「だって、退屈なんだもん。美佳の意地悪見ると気分悪いし、さぼりの共犯者がいたほうが怒られなくてすむしさつ。」

そう言って冬実は笑った。ブランコから降りて駄菓子屋に行きジュース片手に帰ってきた。

「はい、差し入れね。もう少ししたら杏子ちゃん達帰ってくるよ。心配してるね、きつと。杏子ちゃん達が来るまで、これ飲んで気持ちの整理しときなよ。じゃあねっ。」

そい言い残して冬実は帰って行った。

ジュース片手に、いろいろ考えてみた。何故罪悪感がでたのか？罪悪感？本当に罪悪感なのかな？そういえば、ここ数日清水君のことをよく考えるようになってる。別にどうでもいい相手なら誤解を解く必要もないのに。冬実の言ってる事も一理ある。そんな事を考えてどれくらい経ったろう。杏子ちゃんや河野君が走ってきた。

「ゆみちゃん、心配したよ！気がついてたらないんだもん！どうしたの？やっぱり美佳の言葉だよ。傷つくよね。」

「うん、なんか、冬実からいろいろ聞いたよ。美佳は塾で私のこと

結構陰口言ってるらしいよ。」

「えっ、そうなの。冬実も一緒だったの？」

冬実から聞いたことを杏子ちゃんと河野君に話した。やはり二人ともある事、ない事を言う美佳に対して怒ってた。

「清水君にちゃんと手紙の事誤解をとくよ。」

私の気持ちはよくわからないけど、出来る事から片付けていかなきゃと思う。今度は私が決意表明をした。すると河野君が

「あいつ、今日は図書館で調べ物があるって言ってたよ。どうする？」

とりあえず、清水君はこの公園の前は必ず通るから、待ってみると伝えた。すると気を利かせて2人は帰っていった。調べ物があるって、いったい何を調べてるんだらう。いったいどれくらい時間が掛かるんだらう。美佳の塾にはかなりの生徒が通ってて、中には清水君と同じサッカー部の子もいてるはず。絶対いろいろ詮索されてるんだらうな。迷惑かけてるよな・・・と色々頭の中に次から次へといういろいろ思い浮かぶ。色々考えても、起こってしまったことは取り返しがきかない。そう思って私は力いっぱいブランコをこいだ。

スピードがぐんぐん出てくる。空に手が届きそうになる。何もかも忘れて私はブランコに乗った。風が気持ちいい。コーナーから直線に向かって走る時の風みたい。なんだか、嫌な事も風に吹き飛ばされていく。私の気持ちも少しずつ落ち着いてきた。ブランコをこぐ力を緩めて、地面に足をつけた。ふと顔を上げると、清水君がいた。いったい、いつからいたんだらう？

慌てて私は話し出した。

「あの、話があるんだけど・・・」

「うん。」

「この前の、吉川くんに渡した手紙の事なんだけど。」

「うん。」

「実は、私からじゃないの。友達に頼まれて渡しただけなの。個人的に渡すのに、あんなに回りにライバルらしき人のいる所で渡さな

いと思わない？」

「うん。」

「だから、あれは私の手紙じゃなくって、友達なの。それと、謝らないといけない事があるの。」

「うん。」

「美佳の事なんだけど……」

「知ってるよ。」

初めて清水君の口から、他の言葉が出た。その後、なんだか気まずい雰囲気になった。ここで、引き下がるわけにはいかない。変な噂を立てられたから怒ってるのかもしれない。とにかく謝らないといけない。私は話し出した。

「ごめんね。迷惑だよ、変な噂流されて。本当にごめんね。」

「……ごめんなさい。」

「……」

「ごめんね……」

「……なんで、佐々木が謝るの？俺、迷惑って思ってたよ。」

「だって、私達付き合ってるって噂だよ、こんな私とだよ！」

「別に平気だけど……」

清水君の本心なんだろう？そこから一気に冬実から聞いた話をした。

全部話し終わると、清水君は怒るところか笑い出だした。

あまりにも、くちゃくちゃになって笑い出したので、気が変になったんじゃないかと心配した。話題を変えた方がいいのかも、と思いつて聞いてみた。

「ここ最近、元気なかったけど、生徒会忙しいの？そろそろ引継ぎとかでしょ？」

「もう大丈夫、元気になったよ。確かに生徒会も忙しいけど、俺自身の問題でちよつとね。」

「そっか、よかったね。元気になったんなら安心した。だって、この前の教室で美佳に言った言葉、怖かったんだから……」

「だって、俺だって人間だもん。虫の居所が悪い時もあるよ。ちょうど最悪の時に声かけるから。」

「じゃ、もういつもの清水君なんだ。」

「話してて、気づかなかった？」

今度は二人で笑った。久しぶりに大笑い。気がつくと、あたりが薄暗くなってきた。そろそろ帰らないと、さすがに心配するだろう。そんな事を考えてると、清水君が真面目な顔で切り出した。

「もう一回決意表明していい？」

「はい、勝負するの？」

「冗談言わないで、聞いて。」

「はい」

「俺、やっぱり佐々木の事がすごく気になる。佐々木の気持ちは置いといて、俺今回の噂はラッキーと思ってる。逆にそうならいいのについて思った。とりあえず、俺の素直な気持ちです。」

「はい」

「いい機会だから、言ってしまうと吉川に手紙渡したのを見て、正直ショックだった。その事をいろいろ考えた。吉川は俺と違ってもてるし、だから佐々木もきつとって思った。でも、今日話を聞いて俺の誤解ってわかった。ありがとう、話してくれて。今日はわざわざ、図書館で時間つぶした甲斐があったよ。」

「ん？なぜ図書館でわざわざ時間つぶすの？」

「まっ、いいの、いいの。それより、そろそろ帰ろっか？」

確かに早く帰らないと、さすがに心配してると思い公園を出た。もうすぐ生徒会も世代交代、文化祭の時期がやってくる。文化祭が終わると、殆どどの3年生が部活を引退して受験勉強に励む。私も嫌味を言われないように勉強に励まなくっちゃ。家に着き、夕食を済ませて部屋に籠もった。昼間の美佳の嫌味、冬実の分析、清水君の言葉。勉強どころか、頭の中をぐるぐる回ってる。始めは3人の言葉が同じ割合で回ってたのに、気がつくと清水君の言葉だけが回ってる。本心だったのかな？清水君の耳にも噂が回ってたって事はか

なりの人が知ってる。本当に迷惑かけたんだ。でも、清水君はラッキーって言ってた。冬実は、とにかく話せば私の気持ちに整理が出来て、本当の私の気持ちに気づくって言ってたけど、まだ解らない。もう一度、冬実に聞いてみよう。そう思って、早めにベッドに入った。

それから、ばたばたと日は過ぎていった。結局冬実に聞けないままに、美佳の嫌味も慣れっこになってきた。相変わらず、清水君の事は気になって仕方がない。そのうち、文化祭の準備期間に入った。各クラスで展示するものを決めて製作に取り掛かる。私達のクラスは壁画を完成させる事になった。縦×横2メートルのキャンバスに、自然の驚異というタイトルで壁画を描く。原案は美術部の裕子と以外にも美術の成績がいい杏子ちゃんが活火山の噴火をテーマに手がけた。壁画をブロック4つに分けて、ブロックごとにグループを作って製作する。私は冬実と清水君と一緒にになった。私達のグループは地面の部分担当になった。文化部の子が多く、殆んど冬実と清水君と私で準備を始めた。そんなある日、冬実が地面にリアリティーを言い出して、本当の砂を壁画に吹き付けることになった。砂を集めに行かなければいけなくなり、出来るだけ人数の集まる日を探した。結果、集まったのは、冬実と清水君と安部君と私の4人。ちょうどグループ半分が参加した。残りの5人は文化部で、文化祭で発表公演の追い込みで参加できない。私も、練習をサボって参加した。中学の思い出は多いほうがいいと思っただけの決断。何よりも、冬実に清水君も来ると聞いて参加を決めた。いざ、砂を集めると言っても、なかなか砂がない。さすがに公園の砂場の砂を取るわけにもいかない。少し歩くと海があるので、海岸の砂を集める事にした。歩いて30分くらいの所に海がある。砂は大量に必要で、さすがに手では持って帰れない。そこで、冬実と阿部君と私3人で先に海に行って砂を集め、清水君が手押し車を借りて来るという事になった。3人で砂を集める作業よりも、山を作り、木の枝を頂上に差して山

崩しが始まった。木の枝を倒してしまった人は罰ゲームがあつて、山を崩した砂をたくさん持つてる人の質問に必ず答える事になった。最初は阿部君が枝を倒した。砂を一番集めたのは冬実。

「阿部君はどこの高校受験するの？」

「……湖陵高校。」

さすがに、成績優秀の阿部君だけあつて、県下でも有数の進学校だった。私も興味津々、毎日何時間勉強してるの？他に同じ学校受験する子はいろの？将来何になるの？と質問攻めにした。阿部君はゆったりとした口調で丁寧に答えてくれた。自分の身体が弱いから、将来は医者になって一人でも多くの人に健康になつてもらいたいらしい。そこまで、将来のビジョンを見据えてるつてすごいと感心した。感心してる最中に、黙々と冬実は山崩しの準備をしていた。つぎに枝を倒したのは私、砂を一番集めたのは阿部君。

「佐々木は本当に推薦で嶋野高校決まったの？」

「今は仮だね。一応受験はするけど。」

阿部君はその後、さっきのお返しとばかりにいろいろ聞いてきた。将来は何を目指してるの？推薦つて何をするの？殆んど合格してるつて事でしょ？不思議と美佳と同じ事を聞かれてるのに、いらいらしない。将来の夢は嶋野高校をリレーでインターハイに出場する事。その先は、その夢が叶ってから決める。受験も合格ほぼ間違いないけど、文武両道で試験も一般と変わりなく受験する事。違いは目標タイムがあつて、それを夏の試合で突破しないといけなかった事を話した。

「ごめん、俺誤解してたよ。」

阿部君は急に改まって話し出した。ここにも美佳の影響はあつて、受験しないで、走るだけで合格したと思つてたらしい。推薦入試つて楽なんだと思つてて、美佳の言う事を鵜呑みにしてたらしい。美佳と違うのは、話は両方の意見を聞かないと本当のことがわからない。という事で前から私の話を聞きたかったそうだ。そんな話をしてる頃に清水君が手押し車を押しながら歩いてきた。

「たつくくんっ！ここ、ここ！こっちゃんっ！」

阿部君が清水君を呼んでいる。たつくんって、いったいどんな仲間なんだろう？清水君は近づきながら

「何してんだよ。俺、結構恥ずかしい思いしながら手押し車運んできたのに、山崩してんのかよ！」

「たつくん、怒らない。怒ると嫌われるぞ。」

「っていうか、あんた達なんて呼び方してんの？」

冬実が聞いた。

「俺達、幼馴染。家が隣通しで清水のたつくん。俺はこっちゃんって呼ばれてるよ。知らなかった？」

知ってるわけがない。でも、なんかかわいかった。大きくなって二人とも背も高く180cm 近くあるのに、たつくん・こっちゃんって想像したら笑えた。

4人揃ったので、砂を集めて手押し車に載せた。だいぶ肌寒くなってきたのに、身体を動かしていると暖まる。清水君と阿部君は上着を脱いで手押し車を押し出した。そと冬実が彼達の上着を持った。清水君の上着を何も言わずに私に渡した。急に風が強くなってきた。彼達は力仕事をしてるから寒くなさそうだった。でも、私達は暖まった身体が冷えていく。

「寒かったら、上着きていいよ。」

振り向きながら阿部君が言った。

「ありがとう。」

冬実はためらいもなく、阿部君の上着を羽織った。

「あれ、ゆみは寒くないの？いいじゃん、着ちゃえば？別に着れない理由もないでしょ？」

理由はないけど、恥ずかしかった。それでも、冬実がいろいろ言うてくるので羽織った。思ったよりも大きくてびっくりした。普段話してる時はそんなに大きいとは感じてなかったのに、上着を羽織って改めて実感した。そして、何より暖かった。清水君に包まれている感じで、だんだんと嬉しさがこみ上げてきた。

「どう？やつと気づいたでしょ？自分の気持ち？」

冬実に言われて驚いた。どうやら、私は清水君の事が好きになつてゐる。氣になつて仕方がない。心の奥を冬実に見透かされたみたいで恥ずかしくなつた。氣がつくと、冬実は阿部君と手押し車を押していた。清水君がこっちに来た。

「急に佐々木のところにいつてつて言われたから。」

「うん、あつ、上着返さないかね。」

「別にまだいいよ、俺寒くないから。」

そう言つて歩き出した。阿部君と冬実は笑いながらいろいろ話してる。私達は無言のまま。何か話さないと、と思つてると清水君が話してきた。

「さつき、こうちゃんが言つてた。佐々木の受験の事。褒めてたよ、自分だけの力で合格したつて。俺らには出来ない事だつて感心してたよ。」

「うん。」

「で、上野^{ウエノ}が言つてた事が嘘つてやつと信じてくれたよ。さんざん俺も誤解だつて言つてたのに、佐々木の口から聞いて納得したつてこうちゃんは昔っから自分で確かめないと氣がすまないから。」

美佳の事を阿部君に話してたんだ。不思議と穏やかな気持ちになれる。少し前なら、美佳の話題になると無意識にとげがあつたのに。

「でも阿部君もすごいよね、将来のビジョンをしっかりと持つて驚いたよ。」

しかも、湖陵高校つて、難関じゃない？清水君も受験するの？」

「俺はしないよ。まだ悩んでる最中。だから、佐々木やこうちゃんが羨ましいよ。」

「清水君でも悩む事あるんだ！」そう言つて、私は走つた。何だか、清水君の言葉が嬉しくつて、ちよつぷり恥ずかしくつて、逃げた。清水君が追いかけてくる。阿部君や冬実を追い越して私は走つた。普段の練習では感じない、爽快感が不思議とあつた。あつという間に校門まで到着してた。私は清水君の上着を着たままだつた。慌て

て上着を脱いで、手に持った。誰かに見られてるんじゃないかと心配しながら。清水君が走ってきた。

「佐々木、相変わらず早いよ！手押し車も置いてきちゃったよ。後で二人に怒られるね。」

怒られついでに、このまま逃げちゃう？」

いたずらっ子のような笑顔で清水君が言った。

「大丈夫なの？後で怖いよ、きつと。」

「大丈夫だろ、今日は砂運びしか予定してないし。」

「じゃあ、鞆取りに行かなくっちゃ！」

二人で急いで教室に鞆を取りに行った。心配させてはいけないから、冬実の鞆にこっそりメモを残して帰っていった。

秋は夕暮れがはやい。いつもの公園で話してるとすぐに日が暮れる。せつかつくの楽しい時間もあつという間。このまま、もう少し話が出来たらいいのに。そう思っても悲しいかな、受験生の私達。本家で帰宅と言う事がわかつてる。でも、今日1日でいろいろ清水君の事を知れた事が嬉しかった。たつくんって呼ばれてる事、以外に男の子って見た目以上に身体が大きかった事、受験で悩んでる事。生徒会長つてどこか人間離れした感じがあつたから清水君も普通の人間と思うと安心。私ひとり、なんだか得した気分になって家路についた。

その日以降、冬実には頭が上がらない。事あるごとに、冷やかしの視線を投げてくる。無事に壁画も完成し、文化祭がやってきた。文化部の発表の後に生徒会の引継ぎ式が行われる。生徒会も世代交代、河野君も清水君も後輩に託して生徒会を引退。私は頭の中で冬休みの合宿の事を考えた。先輩に混じってやっていけるんだろうか、いじめられたりしないのか、他にも中学生はいてるのか、そんな事が頭によぎりながら引継ぎ式を見ていた。最後の行事が終わり、とうとう受験に向けてのカウントダウンが始まった。この頃になると、さすがに美佳も自分の進路が大切と見えて意地悪をしなくなった。2学期もあと少し。冬休みがやってくる。

学期末試験の最中に顧問に呼び出された。なんと、嶋野高校は遠征合宿に参加するらしく、可能なら私も参加して欲しいとの事だった。顧問が言うには、合宿初日は終業式の日だから休んでも支障はないらしく、チャンスだから参加しろと言う。終業式は週明けの月曜日。私の誕生日の12月24日、クリスマスイブだった。私は親に相談して返事すると伝えて家に帰った。

今日はたまたまお父さんの帰りが早く、家に帰ると両親が揃って映画を見ながらお茶を飲んでいた。

両親が好きな映画、愛と青春の旅立ちだった。最後に主人公が彼女を迎えに製紙工場に行き、後ろから抱き上げるシーンがお気に入り、まさしく今がそのときだった。何度も付き合ってみてるので、そろそろエンドロールが流れる頃。私はエンドロールが流れてから話し出した。

「あのさ、今日顧問が嶋野高校の遠征合宿に行かないかっていったよ。」

「いつなの？」

「終業式の日から、大晦日までだって。」

「ゆみの誕生日じゃないの？お父さん、どうしますか？」

「せっかくなんだし、行ってみればいいじゃないか？何事も勉強だよ。」

「そうね・・・心配だけどいろんな環境に慣れとかなないとね。」

「返事はいつするの？」

「両親の許可が出たら、早めに伝えてって言ってたよ。」

「じゃ、まだ先生がいてるかも知れないから、学校に電話しなさい。」

さすがサラリーマン、と変に関心しながら学校に電話した。顧問もまだ残っていて嶋野高校にも伝えておくかと電話を切った。まだテスト期間中なのでいつまでもリビングにいてると怒られる。慌てて部屋に戻った。部屋のドアを閉め、机に座って勉強もしないのに教科

書やノートを広げる。頭の中は合宿の事で一杯になった。今年の誕生日は、お母さん自慢のケーキが食べれないんだ……。そんな事を考えててふと思った。嶋野高校に入ったら、こうやって合宿が続くんか。冬は誕生日なんて言ってられないんだろかなと思うとなんだか切なくなつた。

次の日、杏子ちゃんには合宿に行く事を告げた。

「ゆみちゃん、すごいね。でも……。せつかくのお誕生日なのに、残念だね。せつかくプレゼントもって行って、おばちゃんのケーキをご馳走になろうと思ってたのになあ。っ。」

「ちよつと、それってケーキ目的なの??？」

笑いながら教室に入った。残るテストも今日と明日で終わり。

とりあえず、美佳に足だけで入学したと言われないように、それなりの成績を残さないと必死で勉強した。なんだか、変なライバル心と自分でもおかしかつた。こうなりや、女の意地である。

何とか、無事にテスト期間も終了し残るはテストの結果待ち。テストが全教科返されるともうすぐ冬休み。私の初合宿参加がやってくる。テストの結果も気になるけど、合宿も気になる。夏は練習にだけ参加したけど、合宿となると行動を朝から晩まで一緒にする。私に出来るんだろか? いじめられたり、意地悪されたりはしないんだろか? 中学生は参加してるんだろか? 考えたらきりが無い。珍しく、自分でも落ち込んでるのが解つた。杏子ちゃんは合宿に参加する事を知ってるので励ましてくれる。せつかくの励ましも、今の私には重荷に感じる。杏子ちゃんには申し訳ないけど、今はそつとして欲しい。ついに自分勝手な私は学校を休んでしまった。明後日は終業式、合宿の準備を部屋でこそそとしてた。杏子ちゃんには心配して、その日配られたプリントを持ってお見舞いに来てくれた。

「ゆみちゃん、大丈夫? ここんとこ元気なかつたし、風邪でもひいたの? 合宿大丈夫? 」

「ありがと、本当は合宿恐怖症で休んじゃった。心配かけてごめん

ね。」

「いいよ、不安だもんね。それよりも、清水君がゆみちゃんが休んでるのは何でだってしつこいのよ。心配なら自分で確認すればいいのにね。」

そう言つてプリントを渡して帰つていった。そういえば、文化祭の後から清水君とはある程度の距離があつた。私は気になりつつも、頭の中は合宿の事で一杯だつた。彼も受験校を絞り込むのに何だか悩んでた感じだつた。4人で帰ることも少なくなり、公園で話すことも少なくなった。

私は次の日も休んだ。明日は合宿だし、今日はゆっくりいろんな事を考えてみようと思つた。ベッドの上で横になりいろいろ考えた。合宿でやっていけるんだろうか？大丈夫だからきつと声が掛かつたんだと思う事にした。こっちは以外に簡単に解決。そのうち清水君の事が頭に浮かんだ。志望校はどこにしたんだろう？この前聞いたときはまだ悩んでるって言つてたし、そろそろ決めないといけないんだろうな。とか頭に浮かぶ。そのうち私はうとうとと眠りこんでいた。目を覚ましたのは、お母さんの声だつた。今日は杏子ちゃんじゃなく、男の子がお見舞いに来た事に驚いてる。前生徒会長の清水君にさらに驚き。部屋に来ていきなりお母さんが言い出した。

「ゆみ、清水君つて男の子が来てるの。清水君つて生徒会長だつた子でしょ？あんた、何悪い事したの？」

ひどい言い方。私は学校休んでるんだから、悪い事も何も出来ないのに。恐るべしPTAの生徒会に対する意識、と感心した。自分の子供は信じて欲しいもんだ。急いで玄関に向かう。

「大丈夫？昨日も休んでたから、渡に聞いたら重症つていうし・・・」

玄関先ではお母さんが聞き耳を立ててる恐れがあつたので、いつも公園に行く事にした。

「身体、大丈夫なのかよ？出歩いて、重症なんだろう？」

「うん、実はさぼりです。」

正直に話した。明日から合宿に参加するから不安でたまらなかった事を一気に話した。相変わらず清水君はきちんと話を聞いてくれた。「よかった、心配したんだぞ。渡はさんざん重症でベッドからも出れないって言うし。拳句、そんなに心配なら自分の目で……」

「ってそうか！やられたよ。まんまと騙されたよ。」

「そう言う、急に清水君は笑い出した。私には良くわからないまま、ブランコをこいでいた。」

「そうそう、今日のプリントをお配りしますね。」

「そう言いながら、鞆の中をこそこそしてる。そのうち数枚のプリントを渡された。そして最後に」

「はい、本当は明日だけど会えないから……」

小さな小包だった。

「何？開けてもいいの？」

「どうぞ、どうぞ。」

かわいいラッピングに包まれた箱を開けると、小さな犬のマスケットが出てきた。

「かわいい！でもどうして？」

「渡が明日誕生日だって言ってたから」

「ありがとう！大事にするねっ！」

「お守りみたいなもんだと思って、かわいがって。合宿でいじめられませんか……」

「ありがとう……いじめられないようにで犬??？」

「そう、いじめられそうになったら吠えちゃえ！」

顔を見合せて笑った。久しぶりの大笑い。いつ以来だろう？清水君といると自然とリラックスできる。合宿の不安もどこかに吹っ飛んだ気がした。

「ありがとね。鞆に着けて持つてくよ！」

「無くさないでくれよ！結構買うとき恥ずかしかったんだから……」

想像すると笑えた。笑うなよという清水君も笑っていた。私の大事

な宝物が出来た。

家に帰ると早速、合宿に持っていく鞆にマスコットをつけた。箱の中を見てみると、手紙が入ってた。手紙というよりは、メモに近い。さつきは気づかなかった。そこにはお誕生日おめでとう、がんばってとだけ書かれてた。何だか、すごく勇気が出てきた。このメモも持って行く事にした。無くすと大変なので小さくたたんでお財布に入れた。

いよいよ7泊8日の合宿が始まった。2日間は移動に消える、実際は5泊6日でみっちり練習が待ってた。嶋野高校だけかと思ってた。いろんな学校が来ての強化合宿だった。朝は6時に起きて7時から朝練でかるくジョギング。その後朝食を摂って9時から午前中の練習。全体練習で基礎的な練習を中心にやる。最初は軽くジョギングでストレッチ。スタート練習やフォームのチェックにタイム測定をする。軽くジョギングで聞いてたのに、実際はアップダウンの激しい山道に神社の階段登りつき。まるで長距離の練習だと思いつつも、必死でついていく。ストレッチになってホッとしたのもつかの間。軽くリズム走でフォームを見ると言われて最後尾にく。リズム走で一定のタイムで走るリズムをつかめと言われピストルになる。最初は訳がわからないままだったが、走っていると段々楽しくなってきた。その後タイムを計るはずが、初参加と言う事で初日だけ免除。やっとお昼ご飯だ。朝ごはんは普通だったけど、昼はどんぶりでご飯が山盛りで出てきた。周りの先輩達は残らずきれいに食べている。私と数人は残してた。後で気づいたが、残してた人は私と同じ中学生だった。食後にお昼寝の時間があり、その時間は運動をしないで身体を休める時間だった。先輩達はわいわいと話してるけど、私は眠くって仕方なかった。午後の練習は、短・中・長距離、跳躍、投てきなど専門種目に分かれての練習。私は短距離に入って練習。死ぬほど走ってようやく晩ご飯。お風呂に入っすぐ寝れるのかと思ってたら、全体でのミーティング後各校に分かれ

てさらにミーティング。初日は全体のミーティングで初参加者の意気込みを語らされた。もちろん、その中に私も含まれる。こんな大勢の前で話せないし話したこともない。ふと清水君は全校生徒の前で平気で話してたんだと気づいた。とうとう私の番がきた。

「佐々木ゆみです。合宿ではでないようにがんばります。とにかく、今の最大の目標です。」

場内が大爆笑になった。恥ずかしくって、顔から火が出るかと思っただ。慌てて自分の席に戻った。その後各校に分かれてのミーティング。嶋野高校だけが集まって反省会だった。

「佐々木、お前たいした度胸だな。先が楽しみだよ」開口一番そう言った。その後先輩達も口々に言い出した。

「本当、普通もごもごしゃべるか、がんばりますただだよ。」

「ささきちゃん、やるね。これで有名人だよ。」

やっと緊張の意図系がきれた感じがした。おちついて周りを良く見てみると、感じのいい先輩達ばかりだった。本当はすぐく私の面倒を見たかったけど、私が人を寄せ付けないオーラを出してたらしい。全体ミーティングでお互いの距離がぐつと近くなった感じがした。

なんとか鬼のような合宿のメニューも無事にこなし、最期の練習が終わった頃に声をかけられた。

「嶋野高校の新入り君じゃないの？どう？無事生きててよかったね！」

どこの学校の監督かはわからないけど、ばてずに皆さんの足を引っ張らなかつた事だけ祈りますと伝えると笑いながら去っていった。結局、誰だったんだろう？明日はやつと家に帰れる。この合宿でちょっぴり大人になった感じがする。帰りのバスの中、気づいたら清水君にもらった小さな犬のマスコットを握り締めて眠っていた。帰りは道が空いていたらしく、到着予定時間よりも3時間も早く帰ってこれた。なんでも、監督が言うには、全員が眠ってて途中のトイレ休憩を何度かやめて運転手さんに飛ばしてもらったそうだ。おかげで、大晦日の昼過ぎには家に帰れた。嶋野高校でバスを降りて、

挨拶を済ませ電車で帰る。家に帰る前に公園に寄ってみた。大晦日の昼過ぎに誰もいてるわけがないのに。ブランコに乗り、合宿を乗り切った達成感を一人かみ締めていた。

「佐々木、何してるの？合宿は？まさか、脱獄したか？」

声のした方を振り向くと、紙袋を抱えた清水君が立っていた。

「清水君こそどうしたの？」

なんでも、お正月準備で買い忘れたものを調達しに行ってたらしい。私は今合宿から帰ってきたことを話した。

「そういえば、子犬のマスコット。役に立ったよ！ありがとう！」

「そんなに吠えるほどつらかったの？」

「いやいや、練習はしんどいけど、いい人たちばかりだったよ。」

「そっか、よかったね。おっと、帰らないと御節が出来ないって怒られるから行くね。」

そう言つて清水君は帰っていった。私も家に帰った。玄関を開けるなりお母さんが走ってきた。久しぶりの娘とのご対面かと期待していると洗濯物の催促だった。

「だって、早く洗うと新年までに乾くでしょ！あつ、おかえり。大掃除もよろしくね。」

疲れて帰ってきた娘に同情は一切無しかよつ、と心の中で叫ぶ。部屋に戻って荷物の整理をした。

今年も後数時間で終わる。何気なくカレンダーをめくってみた。2月はとうとう受験。14日が試験日だった。ちよつと待って、バレンタインだ。私立を受験する女子は、バレンタインという唯一女子から告白するチャンスを奪われてしまうのか。これはひどい。でも、冷静に考えれば学業優先だから仕方がない。同学年に好きな子がいても、相手も受験生じゃ仕方ない。ちよつと待って、私は誰にチョコをあげるつもりでいてるんだろう？気がつけば、子犬のマスコットを握り締めていた。

年も明け、とうとう中学時代最期の学期が始まった。志望校も決まり、残すは受験に向けての傾向と対策を仕上げるだけ。公・私立を1校しか受験しないのか、一応両方受験するのかを始業式後1週間で決める。ほとんどは、12月中に決まってるらしい。直接聞くのもタイミングが合わず結局、清水君がどこの高校を受験するのかまだ知らない。もし、阿部君みたいに遠くに行ってしまうのか、全寮制の高校だったらどうしようなんて考えていた。杏子ちゃんが情報を入手してくれていた。

「ゆみちゃん、清水君全寮制で県外の龍野^{たつの}高校を推薦で受験だつて。」

「えっ、推薦？つていうか、遠いね。電車でも2時間はかかるような場所じゃないの？」

「あれ、ゆみちゃん、逢いにでも行く気ですか？えらく心配しますねっ。」

「いやいや、別にそんな事はないけど、推薦つて龍野高校しか受験しないの？」

そこまではさすがに杏子ちゃんも知らなかった。最終的に、気になるなら自分で確認しろと暖かい友情の言葉をもらった。放課後、気になって図書館に行ってみた。清水君は一番奥の日の当たる場所にいた。ちょうど、清水君の座ってる席は離れ小島みたいな感じで、図書館の隅っこにある。周りには誰もいない。これはちよっと話しやすい。そっと近づいて覗き込んでみた。なんだか、見たこともない化学記号をノートに書いてる最中だった。声をかけるよりは、そっと隣に座って驚かしてやろうと思った。近くの椅子をそっと運び、清水君の隣に座った。全く気づく気配もなく、何もする事がない私はボカボカと日が当たるので段々眠たくなった。

「佐々木、佐々木つてば、大丈夫か？」

囁く声で、目が覚めた。どれくらい眠ってたんだろう？清水君の肩に頭をもたれて眠っていた。かわいそうに、私がもたれたので驚いて、ノートの字も大変な事になってた。小さな声でさらに聞かれる。

「だいぶお疲れですか？」

「ごめんなさい。驚かそうと思ってそつと横に座ったんだけど気づいてもらえなくて」

「いや、かなり驚いたけど。まさか急に寝てるなんて……」
声を潜めて笑った。

「杏子ちゃんに聞いたよ、龍野高校を推薦で受験なんですよ。」

「そつ、担任に言われて、とりあえず受けてみるんだ。」

「とりあえず？」

「そつ、受かる確立は低いけどチャレンジはいい事だし。」

「じゃあ、龍野だけ受験するの？」

「いやいや、公立も受けるよ。どうして？」

「うつん、別に。じゃあ、龍野も私立だから受験日一緒だね。」

「ちがうんだよ、それがさ。変わってる学校で前日の13日なんだつて。」

密かにバレンタインはこつちにいるんだと思った。

「じゃあさ、私の試験が終わったら反省会しない？いつもの公園で……って忙しいか？」

「別に大丈夫だけど、佐々木は何時に帰ってくるの？」

「えっ、わかんない……」

しまった、試験が何時に終わるとか確認不足だった。とにかく、逢う約束は出来た。当日清水君は授業だし、結局授業が終わってから逢う事が決定した。気がつけば、受験まで一ヶ月を切ってた。受験当日までは、死に物狂いで勉強した。最期の追い込み。私立を受験する子達は、バレンタインもどこ吹く風だった。

いよいよ受験当日、私は清水君からもらった子犬のマスコットを鞆に付けてると、試験監の印象も悪いかと思って鞆にしのばせた。ちよつと窮屈だけど、我慢してもらおう。嶋野高校の校門前に到着。殆んどの子が教科書を読んでいる。私はポケットに引っ越した、子犬のマスコットを握り締めた。受験番号によって教室が別けられ、番号ごとに席に着く。大きく深呼吸をして、もう一度ポケットのマ

スコットを握り締めた。国語、数学、英語の順番で試験が進んでいく。お昼を食べて残るは面接だけ。いったい何を聞かれるんだろうと不安になる。受験前に面接対策として担任と予備面接をした。知ってる顔と知らない顔とでは緊張感が違いすぎる。今になって、予備面接は役に立たないと実感した。いよいよ順番が回ってきた。目の前にいるのは、自分の目を疑ったけど陸上部の顧問だった。さっきの緊張感はどこへやら、思ってることを話せた。受験も無事に乗り越え、いよいよ反省会。反省会とはこじ付けで、自分の気持ちを正直に清水君に打ち明けようと思った。季節もちょうどいい、バレンタイン。受験生だって恋はする、と自分に言い聞かせて……。チヨコは公園に行く前の駄菓子屋で購入。ちよっと色気が無いなと思いつながら。思ったよりも早く試験が終わったので、私のほうが先に公園に到着した。これは好都合とばかりに、急いでメッセージカードを書いた。メッセージカードは事前に買っておいたし、ついでにそのお店に売ってた犬のマスコットも買った。清水君からもらった子犬のマスコットに少し似てて、サイズもちよっと大きかった。カードを書き終えて清水君を待つ。受験の時よりも緊張してる。落ち着かないのでブランコをこぐ。片手には子犬のマスコットを握り締めてた。ブランコが空に近づいていく。さっきまでは心配でいろんな事が頭に浮かんでたけど、今は不思議と穏やかになっている。気持ちよくブランコをこいでいると、声が聞こえてきた。

「佐々木、そのまま空に飛んでいちゃうつもりですか？」

慌ててこぐ力を緩めた。清水君が話しかける。

「試験、どうだった？俺は面接は平気だったけど試験がいまいちな？」

「えっ、そうなの？さすが生徒会で全校生徒の前で話してただけはあるね！」

「そう、話すのは平気なんだけど、試験に科学の問題が出たんだよ。あれには驚いたよ！」

「でも、図書館で勉強してたんじゃない？」

「まあね、でも、合格するかはわかんないな……」

「なんて弱気な事言ってるの。」

そういいながら二人でブランコをこいだ。人生初の難問の高校受験、やっぱり受験生なんだと改めて実感した。そんな時に今から自分の気持ちを打ち明けていいのか迷った。せつかなら、受験が終わってからの方が迷惑じゃないのかも思った。自分で反省会しようと呼び出したのに、本当なら勉強しなくっちゃいけないのに、わざわざ時間を作ってくれてる。そんな時にいいのか本当に迷った。迷った時は行動に移すべし、と昔からお父さんに言われてきた。こうなったら、思い切ってバレンタインだし、今の自分の気持ちを素直に打ち明けよう。

「はい、これあげるよ。チョコレート。」

「えっ、ありがとう。でもさ……今日、何の日か知ってってチョコくれるの？」

「うん。でね、今から迷惑かもしれないけど、ちょっと聞いて欲しい事があるんだけど、いい？」

「なんなりと、どうぞ……」

そう言われて、私は話し出した。

文化祭の頃あたりを境に、私は清水君に対する気持ちに気づいた事。冬の合宿前にマスコットをもらって、本当に嬉しかった事、今ではお守り代わりになってる事。受験のこんな大事な時期に、こんな事を言う事はきつといい事ではないと思うし、今更遅いかもしれないけどこれ以上気持ちを抑えれそうに無いので打ち明けた事。

「ごめんね、清水君はまだ公立の為の勉強があるのに、迷惑だよね。自分の気持ちだけ打ち明けて、本当にごめんなさい。これ、今度は私からお守り代わりに……。うん、ストレス解消に使って。」
そう言っただけのマスコットを差し出した。

「ありがとう。」

そう言っただけ、清水君はマスコットを乗せた私の手を暖かく包み込んだ。大きな清水君の手の中に、私の手と犬が小さく収まっている。顔

に全身の血液が集まってくるのがよくわかる。鏡を見なくても、きつと私の顔は真っ赤になってる。これには自信がある。清水君の話が続いてる。

「いつも、佐々木は俺に謝ってるよね。迷惑かけたとかって。俺、そんなの全然気になってないし、むしろ嬉しかった。なんていうか、佐々木との距離が近づいたって感じがしてた。上野の噂が本当になつたらしいのについて気持ちは今も変わらないし。チョコもらえて、本当に嬉しいよ。ありがとう。」

「でも、ごめんね。チョコ、時間が無くってその駄菓子屋で買ったの……」

「ほら、また謝る……っていうか、駄菓子屋のチョコなの……っ！」

「あつ、でも、本命チョコ。大本命チョコだから……」

そう言って二人で大笑いした。しばらくベンチに座って話をした。周りから見られても解らないように、お互いの鞆で手を繋いでるのを隠して座った。手を繋いでるだけなのに、まるで試合でゴールした時みたいにドキドキしてる。寒いはずなのに、清水君の暖かさが私に伝わってくる。いいのか、受験生。こんな時期に色気づいて、と思ったけど気持ちを打ち明けてよかった。打ち明けずにいてると、きつと気が変になってた気がする。結果は、付き合うとかの意思表示は無く、ただお互いの気持ちを打ち明けただけだった。それだけで、充分だった。変に付き合うという形に収まってしまつと、卒業と同時に別れが待っている。清水君は龍野高校に合格すると全寮制だから、逢う事も出来ない。それに、私もきつと部活が忙しくなつてそれと頃じゃなくなると思うと、今のままで良かった。それに、まだ公立も受験する清水君に負担になるのも嫌だし……

「そっか、お揃いになるのかな？このマスコット？」

「多分、なるような……極力似てるのを探したんだけど……どう？」

そう言って、私は清水君にもらったマスコットを差し出した。

「あつ、いいねえ〜っ、似てるよ！お揃いだよ！俺もお守りにするよ。ありがとう。」

「ご利益が無かったらごめんねっ。」

「また、謝る！でも、本当にありがとう。」

辺りが薄暗くなってきた、そろそろ帰る時間だ。名残惜しいが、あまり遅くまで公園にいと風邪を引いてもいけないので、帰ることにした。別れた後も私の手には、清水君のぬくもりがあるように感じた。これって、両思いって事でいいのかな？なんて思いながら家に帰った。

あと少しで公立の入試、卒業式とタイムリミットが近づいている。

数週後、私は無事に嶋野高校に合格した。顧問と一緒に高校に挨拶に行った。5月にあるインターハイの予選に向けて、猛特訓が待っていると言われた。卒業までは自分のペースで調整して欲しい、練習は高校に来ても構わないと言われた。高校からの帰り道で顧問が急に話し出した。

「お前達の世代は優秀な生徒が揃ってるな。」

「そうなの？」

「阿部は難関の湖陵高校だろ、清水も龍野に合格したし、お前も嶋野に推薦で入ったし。それに山田だって名門中の名門、っていうか、みんなお前と同じクラスじゃないか！驚きだな！」

「冬実はどこの高校なの？聞いてないよ私。てっきり公立だと思ってたよ。」

「公立でも特殊で、学校のトップクラスでも難しい大浜学園だ。ここは、試験日が私立と同じ日が試験日なんだ。今年は全員合格間違いないんだな！」

冬実の受験校には驚いたけど、清水君も合格した事が嬉しかった。嬉しかったけど、全寮制の高校。公立も受けるって言ってたけど、どうするんだろう？聞いてみたいけど、聞くのが怖い。自分の事を棚に上げる訳じゃないけど、全寮制なら全く逢えない。私だって部

活でそれ所じゃないけど、近所にいると何かと出会えるのに。でも、私達はまだ付き合ってる訳でもないから、心配しすぎなのかもしれない。そう思う事にしたけど、やっぱり気になる。卒業式まであと少し、清水君の進路が気になる。顧問とも別れ駅から家に帰る途中、阿部君に会った。

「あれ、佐々木。こんなところでどうしたの？」

「阿部君こそ・・・私は嶋野に合格の報告に顧問と行ってたの。それよりも、すごいね。湖陵に合格したんでしょ。顧問から聞いたよ。今年は優秀だつて。清水君や冬実の事も言ってた。」

「ありがと。たつくん、の事聞いたんだ。」

「うん・・・一応公立も受けるって言ってたけど、龍野に行くのかな？」

「たつくん、昔から僕が病院に検査に行く時は一緒に来てくれて、検査の機械とかに興味を持ってたの。将来は検査の機械とかを開発したいと言ってたの。龍野はそっち方面に強いから、もしかしたら龍野に決めるかもね。そうなったら寂しい？」

阿部君はゆったりと穏やかな口調で、確信をずばり突いてきた。

「そうだね、やっぱり寂しいよ。」

「あつ、そういえば佐々木、チョコあげたでしょ。たつくんたら、いきなり家に来て自慢して帰ったよ。よっぽど嬉しかったんだね。もう、ずっと話してるんだよ。興奮しちゃっておもしろいの。おちつけて言っても、いきなり犬のマスケット出して撫でだすし、触ろうとしたら怒られるし。あんなたつくん初めてみたよ。で、これから君達はどうなるの？」

いつも冷静な清水君の意外な一面を聞けて嬉しかった。嬉しかったけど、阿部君の質問が鋭い。

「わからない。」

私は正直に答えた。

私達の関係ははつきりしないまま、公立の受験日を迎えた。大半の生徒が受験するので教室は寂しいものだった。杏子ちゃんも清水君ももちろんお休み。授業も身が入らず、私は心ここにあらず状態だった。見かねた冬実が声をかけてきた。

「ゆみ、寂しいんですよ。高校に行ったらこんな感じだよ。新しい環境、全く知らないクラスメイト。新しい生活が待ってるよ。」

そう言いながら笑ってる。確かにその通りだ。杏子ちゃんも違う学校、練習も今以上に厳しくなる。急に不安になってきた。公立の合格発表を待たずに私達は卒業する。卒業まであと5日。合格発表はその4日後、その数日後には嶋野高校の合宿が待ってる。私はいたいどうなるんだろう？

悩みながらも日々は過ぎてとうとう卒業式になった。この頃にはうつすら桜が咲き出してる。暖かい日差しの中、卒業生の名前が呼ばれ卒業証書が授与される。未だに私は清水君の進路を聞けないでいた。自分の名前が呼ばれ、証書をもらいに行く。その後学校長の言葉、在校生の送辞があり卒業生の答辞がある。答辞は元生徒会長の清水君が詠む。電話をすれば聞ける声だけど、もしかしたらこれで最後かもしれない。そう思っで心して聞いた。在校生が演奏する音楽を聴きながら式典は無事終わり、一旦私達は教室に戻る。もう二度と座れない席に座って担任の言葉を聞く。担任が教室に戻ってくるまでの間は、相変わらず賑やかだった。男子には制服のボタンを欲しいといってくる女子が群がり、人気のある男子はボタンが無い子までいた。そのうちの一人は吉川くんだった。下級生からもボタンを狙われてる。人気のある子は大変だなって思った。ボタンも胸に近いボタン、第2ボタンが彼女や好きな子に渡す大事なボタンの意味で、それを皆が狙ってた。気がつくとも美佳が清水君のところにいた。

「ゆみちゃん、いいの？美佳、清水君の第2ボタンもらって言うてたよ。」

杏子ちゃんが慌てて教えに来てくれた。出来る事なら、私だって欲

しい。でもボタンを誰にあげるかは清水君が決める事。自分から言い出す勇気が無くて我慢していた。すると、美佳が顔を真っ赤にしてこっちに来た。すると、びっくりするくらい怖い顔で話し出した。

「ひどいんだよ、清水君。ボタン1個もくれないの！渡したい子がいるから、誰にもあげないんだって。思い出に思って思ったのに、最後まで悔しい思いさせられた。誰なのかしら、渡したい子って。」

そう言いながら、確実に私を睨みながら言ってくる。

「美佳、それだから最後まで相手にされないんだよ。」

冬実がずばつと言った。美佳はぶつぶつ言いながら、当り散らして自分の席に座った。

「きつと、ゆみにじゃないの？ボタン渡したい子って……」

杏子ちゃんと冬実が好奇心一杯の視線を投げた。私としてはそう願いたい。でも、まだ自分にもらえるか自信が無かった。

「わかんないよ……」

そう言うのがやっとだった。

やっと担任が戻ってきた。話といっても公立の受験結果を知らせに来いとか、入学式までは大人しくとかいう事だった。話はすぐに終わり、写真撮影の時間になった。担任はカメラが趣味だった。そういえば、修学旅行でもやったら写真を撮っていた。セルフタイマーで集合写真を何枚も撮った。その後は仲のいいグループごと、そして他薦・自薦を問わずカップルで撮り出した。付き合ってる子同士でカメラの前に立ってる。結局、言い出せないまま撮影タイムも終わってしまった。杏子ちゃんと冬実が近づいてきた。

「ゆみちゃん、この後冬実達と海にでも行かない？卒業しちゃうとなかなか逢えないし。」

「ゆみ、行こうよ。時間、大丈夫でしょ？」

「えっ、大丈夫だけど……」

私の中では、清水君がどんな進路を選択したか聞きたいのと、ボタンが欲しい。でも、結局は勇気が無くて言い出せない。杏子ちゃん

んと冬実と海に行く事に決めた。

担任の最後の挨拶も終わり、教室を出る時間になった。いろいろあった教室。これで2度と足を踏み入れる事のない、思い出の詰まった教室。数日後には、社会に出る人や新しい環境に馴染んでいく私達。なんだか、嬉しい反面寂しい気持ちで胸が一杯になった。

そんな感傷に浸ってたのに、味気なく教室を追い出され、いつの間にか集まった先生達や在校生に見送られながら校門を出た。そのまゝ、私達は海まで歩いた。同じ考えの子達もいるようで、数人はすでに海に到着してた。

「知ってる？卒業式の後には、カップルがこの海に来るのが伝統なんだって。」

杏子ちゃんは笑いながら話した。

「えっ？でも、私達女の子だけだよ？」

そう言っと、杏子ちゃんと冬実は笑った。

「よく見てみなよ。同じ男同士3人もいてるよ。」

冬実は遠くを指差して言った。

目を凝らしてよく見ると、そこには杏子ちゃんの彼の河野君に阿部君、清水君がいた。

「なんで????？」

私は思わず声に出してつぶやいた。

「杏子ちゃんと河野君。ゆみと清水君。で、私と阿部君。私達はカップルじゃないけど、以外に話も合うし、お互いゆみ達の事が気になるし。まっ、云わば保護者的なものだね。」

「じゃ、私、彼のところに行ってくるね。」

そっぴい残して、杏子ちゃんは颯爽と走り去った。その後姿を見て冬実がつぶやく。

「かわいいね、女の子って感じでさ。ゆみも素直になったら？いろいろ聞きたいんでしょ？杏子ちゃん達は同じ高校だけど、もしかしたらあんた達離れ離れでしょ？ゆっくり話すのも最後かもしれないのに……全く、世話の焼ける子達だね。」

「冬実は何かしってるの？」

「自分で聞きなよ、それくらい。もう、お節介も出来なくなるしさつ。」

そう言つて冬実も行つてしまった。ふと見ると、杏子ちゃんと河野君はもういない。阿部君の所に冬実が行つて、何やら話してる。罰惡そうに清水君が頭をかいていた。

せつかなんだし、私も清水君のところに行かなくっちゃ。はつきりと聞かないと、そう思つて歩き出した。すると、清水君も私のほうに向かつて歩き出していた。そのまま、二人で波打ち際まで無言で歩いた。波打ち際の横手には、どこからかは解らないけど流れ着いた大きな船がある。その船の甲板に座った。しばらくは二人で海を眺めてた。

「そうだ、卒業おめでとう。」

「あつ、ありがとう。佐々木も、卒業おめでとう。何か変じゃない？同級生で卒業祝うつて。」

「確かにそうだね……」

そう言つて大笑い。すると、私の手の上に清水君の手の温もりを感じた。慌てて清水君の顔を見ると、すごく真面目な顔をして、更に私の手を強く握ってきた。

「俺さ、実は公立受験してないんだ。龍野に行こうと思って。やっぱり、目標を持つっていいなって佐々木に教わった気がする。だから、龍野に行つてみようつて思った。」

「えっ？でも、公立の受験日お休みしてたじゃない？」

「そうなんだ。タイミング悪く熱出しちゃってさ、休んだんだよ。」

「こうちゃんに聞かなかった？」

「全然教えてくれてないよ。でも、龍野なんだ。じゃ、寮生活だね。公立だったら、また前みたいに公園でばったり逢えるかなつて思つてたのに、もう逢えなくなるね。」

「そうだね。でも、佐々木も嶋野で部活忙しくなるでしょ。お互い忙しい身だね。」

「……やっぱり、寂しい？」

「自分の事棚に上げて言うのもおかしいけど、どつかで逢えるって思ってたから。本当にこれで逢えなくなるって思うと……. やっぱり、寂しいよ…….」

「そういう終える間もなく、涙が自然に溢れ出した。別にこれで、一生逢えなくなるわけでもないのに、清水君の寮まで遊びに行く事だって出来るのに。電車に乗れば2時間ちょっと。電話すれば、声だって聞けるのに、私の中ではこの世の終わりのような感情が込み上げてきて涙が止まらない。こんなに感情的になった自分に驚いた。でも、それ以上に清水君は驚いたに違いない。苦肉の策で清水君は私の頭をなでながら、大丈夫だからと何度も口にする。何が大丈夫なの？ そう思うとまた涙が溢れる。もう、止まらない。」

「佐々木、ごめん。」

「そう言っつて清水君は私を抱き寄せた。」

「大丈夫、佐々木はがんばってインターハイに出て次の夢に向かう。俺は応援する。時間が合えば試合にだって応援に行くよ。これで、逢えないわけじゃない。電話くれたら、飛んでいく事は出来ないけど、出来るだけ早く佐々木の近くに行くようにする。嫌な事があつたら、お守りにあたればいい。俺もこっちに帰ってくるときは絶対連絡する。だから、泣かないで。」

「本当？」

「うん、本当、だから泣き止んで。そうだ、これあげるから。数少ないライバルを退けて、佐々木にあげたくって守ってきたんだから。」

「そう言っつて第2ボタンをくれた。」

「ありがとう。」

「これで、お守りが二つ。最強だよ、きつと。だから、大丈夫。何があつても俺は佐々木のそばにいてるから。安心して。」

「そう言いながら清水君は私の頭をなでてくれた。」

「それに、すぐ寮に入るわけじゃないから、デートだってできるん

だよ。まっ、佐々木のスケジュールが空いてただけだね。」

すると、冬実達がこっちに来了。

「ゆみ、聞いてよ。杏子ちゃん、写真撮るだけ撮ったらあつさり帰っちゃたんだよ。ひどくない？」

「そうだ、たつくん。山田がさ、カメラ持ってるんだよ。写真撮ってもらえば？どうせ、二人の事だから、担任の撮影会にも参加してないし。撮られちゃまずい事情も無いでしょ？」

「うん、俺は別にいいけど……」

「じゃあ、ちよつと待ってて。ゆみを見れる状態にするから。」
冬実に腕をとられて、彼達から少し離れた。

「ゆみ、何泣いてるの？これで一生逢えないわけじゃないし、電話すればいいんだし。逢いたくなったら、帰り道にちよつと足を伸ばせば逢えるんだよ。これで最後になるか、最初の記念になるかは、ゆみ次第なんだよ。笑顔で写真。いい？わかった？」

「でも……」

「でもないよ。」

そう言いながら、冬身は私の身体をくすぐりだした。

「ちよつと、やめてよ、くすぐりたいよ……」

あまりにもくすぐったくて笑った。笑うと今までのへこんでた気持ちもまぎれた。あまりにも大声で笑い出したので、彼らも慌てて近寄ってきた。

「佐々木、大丈夫？たつくんのせいでおかしくなっちゃたんじゃない？」

「こうちゃん、失礼な事言っなよ。俺何してないよ。」

「ごめん、ごめん。ちよつと遊びすぎたよ。これでゆみもいつもと一緒にでしょ。さ、写真撮ろっか？」

ちよつと離れるだけでおお泣きしたり、この中にいるとすごく自分が子供に思える。4人とも同じ歳なのに、私以外はすごく大人に感じる。やっぱり、将来のビジョンをしっかりと持って、その目標に

向かって1歩ずつ進んでいるからなのかと思う。私といえば、近い目標しかない。こんな私でいいのかとも思う。清水君に相応しいんだろつかとも。でも、それは少しずつこれから考えればいい事。そんな事をぼんやり考えてるうちに、冬実と阿部君が撮影はここがいい。というポイントまで歩いた。そこには早咲きの桜がほぼ満開の状態だった。

「ほら、桜をバックに撮ると、何だか前向きになるでしょ。二人の門出を祝って……」

冬実はカメラ越しに話しかけてくる。私達は出来るだけ笑顔を心掛けて写真を撮った。

「だめだよ、二人とも緊張しすぎ。もっとリラックスしなよ。」

冬実はカメラマン気取りだ。阿部君までもが悪乗りしてきた。

「そうだよ、いつそのこと手でも繋いじゃえばいいのに。」

そう言われて、私達は顔を見合わせた。そして、自然と手を繋いでいた。

「いい顔になったよ。じゃ、撮るよ……」

これから先、人生で何があるかわからない。目標に向かつて今は意気揚々としてる私達だけど、どこで挫折するかわからない。また、私と清水君とも始まったばかり。こっちもどうなるかわからない。解らない事ばかりの人生も、きっと楽しいはず。でも、桜の花が咲くたびに今日の事を思い出すだろう。そして、つらい事や苦しい事が起きた時は、今日の日の写真を眺めて気持ちをリセット出来る気がする。桜の花の咲く頃には、これからもきっと楽しい事が待ってる。

振り返る時……

卒業してから数日後、冬実から連絡があった。

「ゆみは、いつあいてる？写真、渡したいんだけど……」

卒業式の後、海で冬実が撮ってくれた清水君との写真だった。

「明日とかは急すぎる？」

嶋野高校の合宿にはまだ日があるし、明日なら練習もお休みだった。

「明日なら、大丈夫。練習もないし……」

「じゃあ、1時にいつもの公園で待っててね。」

そう言うとう電話は切れた。

思い出の多い写真。あの写真を撮った時は、私は人生最後の別れみたいに大泣きしてた。

困り果てた清水君は私をそっと抱き寄せて「大丈夫」と何度も繰り返した。

何に対して大丈夫なんだと思いつつ、溢れる涙を止めることは出来なかった。

そんな時に、冬実と阿部君が写真を撮ろうと近づいてきた。

二人並んで、手を繋いで写った写真。

卒業して1週間も経ってないのに、すぐ時が流れてる気がする。

そういえば、あれから清水君とも連絡を取ってない。

彼も全寮制の龍野高校へ入学の準備があるだろうし、私も練習の日々。

ついつい連絡するのも遠慮していた。

いつ、清水君は入寮しちゃうんだろ？そんな事を考えながら、明日を楽しみにした。

約束の時間より少し早めに公園に着いた。

そこにはすでに冬実が阿部君と待っていた。阿部君は県内でも有数の進学校の湖陵高校こりやうこうに進学が決まっていた。かくいう冬実も公立で

も難関中の難関、大浜学園に進学。

二人とも学年では1・2位の成績だった事を進路を聞いて知った。そして、清水君もトップクラスの成績じゃないと入れない龍野高校だった。

私はといえば、陸上の推薦枠で決まった嶋野高校。でも、きちんと結果を出しての入学なので

恥じる事は何も無かった。ただ、この4人になるとすごく自分が子供に感じる。

「おおーっ、ゆみ。さすがに早いね。」

「ひさしぶり・・・つても変だけどね。連絡ありがとね。」

「どうせ、ゆみの事だから清水君に連絡取ってないんじゃないかなって思っで。」

「そうそう、たっくんも心なしか連絡しにくそうだったし。」

「何で???」

「そりゃあ、練習の事とかあるから、遠慮してるみたいだよ。」

「そうなんだ・・・でも、どうして二人がいるの?」

「もうすぐたっくんも来るよ。」

「呼んじやった。阿部君とで図書館行くから、二人で適当に過ごしなよ。」

「そうそう、たっくんも入寮間近だしね。」

「そうなの???」

「そうそう、これ。清水君の分もあるから、ちゃんと渡しておいてよっ！」

じゃあ、落ちこぼれないためにも、勉学に励みにいきますか?」

「お邪魔になるのも嫌だしね。たっくんには佐々木が来る事言っていないから、驚く顔だけでも見たいんだけどな・・・」

阿部君の一言で、冬実の作戦が始まった。

有無を言わず、私には4人分の飲み物を駄菓子屋に買いに行かせた。

しかも、運ぶのに時間のかかるカップの飲み物。4個もどうやって

運ぶんだ！と思いつつも逆らえず

駄菓子やへと向かった。

なんとか購入し、おばちゃんと相談してどう運ぶかを試行錯誤。おばちゃんは笑いながら

「あんた、これじゃあ、罰ゲームだよ！」

と言いお店の多くに入って紙製のトレイを持ってきた。それはカッ
プホルダーになっていてお盆代わりにもなった。「気をつけてねえ
っ！」というおばちゃんの声を背中に、少しゆっくり歩いた。

もう清水君は来たのかな？などと考えながら、ジュースをこぼさないように、慎重に歩いた。

「あれ、こうちゃん。山田と一緒になの？」

「そう、図書館で勉強に励まなかったって思ってたの。」

「えっ、俺も図書館??？」

「ちがうよ、清水君にはもっと大事な用事があったからさっ。」

「えっ、何だよ……」

「たっくん、あそこ。よく見てみなよ。」

ちょうど、冬実と阿部君がにやにやしてるのが見えた。少し行くと、
二人に隠れてた清水君が見えた。

清水君の顔が驚いてる。私は、慎重にジュースを運ぶ。

「あれ……どうして佐々木までいるの？」

「だって、たっくん。連絡しにくい感じだったし……」

「どうせ、ゆみのことだから、遠慮して連絡してないとも思ったか
ら……」

「あっ……ありがと。」

やっとジュースを運べた。

「冬実、ひどいよ。運べないよ！」

「じゃ、とりあえず、ベンチにでも……」

そう言つて4人でベンチに座つた。なんだか、変な感じ。やっぱり、自分だけが子供のような感じ。

ジュースを飲みながら、これからの事を話した。さすが、成績優秀な冬実と阿部君だけあつて、予習をばっちりして授業においてかないように図書館で勉強するらしい。拳句、私と清水君は勝手にどうぞ、とさつさで行つてしまった。残された二人……何も考へてなかつたから暫くは無言だつた。

「これから、どうしよつか？清水君は時間大丈夫？」

「大丈夫だけど……佐々木は？」

「もちろん、大丈夫。」

そしてまた無言。二人で路頭に迷つた末に出した結論は、卒業式の後に行つた海に行く事だつた。

何処からか漂着した船の甲板に腰を下ろして暫く海を見つめていた。この前、ここに座つた時は大泣きした私が嘘みたいだつた。

あの時は、こんな感じで清水君とももう逢えない、この世の終わりのように感じていた。でも、今、またこうして一緒に座っている。

そう思うと、なんだか笑いがこみ上げてきた。

「どうしたんだよ？急に笑い出して……」

「あつ、ごめん。だって、この前は……っていうか、ほんの数日前なのにあんなに大泣きしてたのに。」

今、またこうして二人で座つてるのが何か、おかしくつて……

・

「ああ……つ、本当にあの時は驚いたよ。あんなに大泣きされるなんて思わなかつたし……」

「ごめんね……私も、この世の終わりだあ……つて、勝手に思つちやつて……」

そう言つと、二人で大笑いした。やっと、緊張が解けたみたいで色々話した。

「そうそう、忘れてた。」

私はそう言つて、冬実から預かった写真を渡した。

「二人で写つてる写真だつて。卒業式の時の……」

「もう出来たんだ、早いねえ〜つ。佐々木はもう見たの？」

「あつ、まだ見てないっ！」

清水君は封筒から写真を取り出した。私は、彼の手元を覗き込んだ。早咲きの桜が満開の写真。

「寂しくなったら、この写真でも眺めとかなきゃなつ……………」

「そういえば、清水君の入寮しきつていつ？」

「明後日……………」

「明後日つてもうすぐだね。残念。私もその日から合宿だよ。お見送りに行けないやつ。」

「合宿の準備は整つたの？」

「まだ……………でも、すぐ出来るしね。清水君こそ、準備万端なの？」

「うう〜んつ、荷物の整理は出来ただけどさあ〜つ……………」

「何か引つかかつてるの？」

「いろいろとね……………悩めるお年頃なんですよ……………」
また二人で大笑い。

「結局さ、俺達どっかに行つたか思いでもないなあ〜つて思つて……………」

寂しい寮生活を送るのかと思うとさ……………」

そついい終わるが早いか、清水君はそつと、私の肩に手を回し抱き寄せた。

「このまま、少しいさせてくれないかな？」

この前は抱きしめられたけど、大泣きしてたからそれどころじゃなかった。ただ、ただ清水君と離れるのが不安で仕方なかった。肩を抱かれて、少し考える余裕が出てくると明後日には入寮してしまう。今度こそ、本当に逢えなくなるんだと実感がわいてきた。だんだん、涙が溢れてきた。

どうしよう、明後日には本当に離れ離れになっちゃう……頭の中には、その事がぐるぐる回る。回れば回るほど、涙が溢れ出てきた。

終に私は声を殺しながら泣いていた。

これで、本当に逢えなくなる……

「佐々木、泣かないで……」

清水君はそう言いながら、私を抱きしめた。

「だって、もう逢えなくなっちゃうよ……」

「大丈夫。佐々木は試合とかがんばらないと。連絡くれれば、試合に応援にだって行くよ。」

連絡くれれば、飛んではいけないけど、出来るだけ急いで逢いに来て来る。

だから、泣かないで。」

「だって……」

「……あんまり泣いちゃうと、俺も寂しくなるでしょう。だから、泣かないで……」

清水君の胸に顔をうずめて、暫く泣いた。

泣いている私を力強く抱きしめてくれた。

「そうだ、佐々木。ちょっと顔上げてみて。」

「えっ？」

「眼を閉じてみて。泣き虫さんに魔法をかけてあげるよ。」

「えっ？」

「眼を閉じてみて……」

言われるがままに眼を閉じた。

どれくらい経っただろう？

眼を閉じてから、すごく長い時間が経ったように感じる。

慌てて眼を開けようと思ったときだった。

何かが唇に触れた。

ほんの数秒の出来事なのに、永遠に感じる時間。時が止まったよう

だった。

「泣き虫さんが強くなりますようにって……願いを込めて……」

これで、寂しい時もがんばれるでしょっ。」

「えっ???」

「お互い、寂しい時も乗り切れるかなって……どう、がんばれそう？」

「えっ???」

私の頭の中はパニック状態だった。言葉がでるのは、間抜けな「えっ???」って事だけ。

「どう？勇気を出してみました。だから、離れてもがんばろうよ。ねっ……」

「えっ……あっ……はいっ……」

そのまま、暫く海を眺めている事にした。

もちろん、清水君は私の肩を抱いていた。私も彼の肩に頭をもたれていた。

少しずつ冷静に考えれるようになった。

そこで、気付いた！

これって、ファーストキス???

そう思うと、また顔が赤くなるのがわかった。

清水君は平気なんだろうか？私は、こんなにドキドキして顔が赤くなるのを感じるのに……

そんな心の中を見透かしたかのように、清水君は海を見ながら話した。

「なんか、すごい俺、ドキドキしてる。まさか、自分でもびっくりしたよ。」

勝手に身体が動いちゃって……無性に愛しく感じちゃって・

・・・・・・・・

びつくりしたよね。ごめん。」

「よかったあゝゝつ。私だけがドキドキしてるのかと思ったよ。

生まれて始めての事だし、頭の中がパニックだったんだから・・・

・・・・」

「実は、俺も・・・・・・・・」

また二人で大笑いした。

私達は、今日の日の事を忘れない。

これから先、不安な事だらけだけど、私には強い見方がいる。そう
思うと不安も軽くなる。

私にとって清水君がそうであるように、清水君にとっても私がそんな
存在になればいいな・・・

少しだけ、大人になった気がする。

そして、少しだけ、強くなれた気がする・・・・

辛くなったら、この海にまで来て今日の事をおもいだそう。

これから先の人生をがんばって乗り切っていこうと思う。

この大きな海を見ながら・・・・・・・・

振り返る時・・・（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今後の参考にしたいと思います。

ぜひ感想を教えてください。よろしくお願いいたします。

少しだけの成長（前書き）

卒業してから、もう逢えないと思って大泣きした私。

困った彼は、泣き虫が治まるようにと、私におまじないをかけてくれた。

そんな日から、数ヶ月しか経ってないのに・・・

少しだけの成長

あの海で、清水くんとキスをした。

ほんの少し前の出来事なのに、みんなそれぞれの新生活がスタートした。

私は、いつまでも続くとってた中学生生活を卒業し、今はインターハイ出場に向けて猛練習中。

冬実や阿部くんは、難関の進学校に行ったので、きっと勉強が大変なんだろうな。

清水くんは、入寮して環境も変わり、もう慣れたのかな？

入寮したので、もちろん近所にはいない。

だから、逢えることも無い。

近所にいてるはずの冬実や阿部くんにすら逢わない。

本屋とかで、ばったり・・・なんて事も無い。

きっと、それは私の生活環境のせいだと思う。

毎日朝早くから練習して、夜も遅くまで練習・・・・・・・・

たった電車で30分ほどの通学時間も、今の私には仮眠時間。

電車の心地よい揺れの中、いつも清水くんとあの海が出てくる。

眼が覚めると、手帳に入れてある卒業式で撮った写真を眺める。

「今頃、勉強してるのかな？もう、慣れたのかな？」

そんな事ばかり考えてる。お互い電話も出来ない状態が続いた。

もちろん、電話をかけられるけど、彼に繋がる前に寮母さんに繋がるらしい。

そこから、アナウンスで電話室に呼ばれるらしい。

何だか、昔のドラマみたい！と思ってたけど、実際にはかける勇気が無い。

クラスの中では、ちらほら携帯を持ってる子を見かけるようになった。

携帯があれば、いつでも彼に直接電話が出来る。って話してた。

さすが、私立と感心しつつ、羨ましい思いだった。

そんな気持ちとは裏腹に、インターハイの予選が始まっていく。

各都道府県の予選があり、その次に、北海道・東北・関東・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州

の地域に分かれてのブロック予選があって、やっとインターハイに出場となる。

私は、個人種目の200mとリレーメンバーに選ばれた。

リレーでは2走を走る。1走は同じ1年のあみ、3走は2年の久美^{ひさみ}先輩で

アンカーが2年の美恵^{みえ}先輩だった。3年に短距離のメンバーがいたけど

私とあみでリレーメンバーに起用されたので、外れることになった。

私達が決めたわけじゃないけど、他の3年の先輩達も驚いていた。

合宿の時は、あんなにかわいがってくれてたのに、リレーメンバーから外れたとたん

嫌味を言われるようになった。

久美先輩や美恵先輩はいろいろ気遣ってくれて、フォローをしてくれる。

あみは、中等部から一緒に練習してたから平気だけど、ターゲットはどうやら私みたいだった。

さすが、女子校。噂どおりいじめは健在なんだ！と変に関心する日々だった。

そんなある日、タイムトライアルをするので、スパイクに履き替えて記録をとる時の事だった。

もちろん、グラウンドをしつかり捕まえるために、シューズにはピンがついている。

普段は、ピンを土用にしていた、試合になったら家に持って帰ってピンを交換する。

だからスパイクは、いつも部室の棚にバックに入れれに置きっぱなしにしている。

いつものように、グラウンドにスパイクの入ったバックを持っていた。

マネージャーに言われて、スパイクを履こうとバックから出したら、見事にピンが全て外されていた。

慌てて、ピンをはめていると3年のたまき先輩が叫んだ。

「早くしてよ！身体、冷えちゃうよ！準備不足だよねっ！」

久美先輩や美恵先輩が駆け寄ってきた。

「ゆみちゃん、大丈夫？」

「また、たまき先輩だよ！私もされた事あるもん。」

久美先輩も、たまき先輩にピンを外された経験者だった。美恵先輩が

「たまき先輩、僻みっぱいから……」

そう言いながら、ピンをはめるのを手伝ってくれた。

ピンをはめるには、専用のハンドルでねじを巻くみたいに取り付けるので、かなり時間がかかる。

背後から、たまき先輩が叫ぶ。

「早くしてよ！帰れないじゃんっ！！」

私とたまき先輩とが一緒に走って記録を録るため、先輩は待ってる。

久美先輩と美恵先輩は既に記録をと録った後だった。

やっとの思い出ピンをはめて、私達は走り出す。

直線距離にして120m、スタートして20m走った時点でピストルがなりそこから100mの記録を録る。

私には、訳がわからないが、とにかく言われたとおりに走った。

ピストルが鳴った頃には、私は気持ちよく足が動いた。

さっきまでのへこんだ気持ちも何処かに吹っ飛んだみたい。

気がつけば、たまき先輩よりも先にゴールしていた。

その事がたまき先輩にとって、かなりショックだったようで、帰りに部室を出ようとする。

「あのタイムは、ゆみを待って身体が冷えたのよ。本当の私のタイムじゃないからねっ。」

調子に乗らないでよ。」

振り向きながら、そうはき捨て先輩は帰っていった。

さすがの私も限界だった。

入学してからまだ数ヶ月、こんなに早く気持ちが折れるなんて・・・

先輩や、同級生達がまだ部室で盛り上がってる中、私はそっと帰った。

電車に揺られ、明日から予選会なのに、こんな事で大丈夫？と自問した。答えは出なかった。

気がついたら、清水くんの寮のある駅に降りていた。

声を聞いたら、元気になるかな？勇気が沸くかな？

意地悪されても、耐えられる気持ちが出てくるかな？

そんな事を思いながら、お守りのマスコットを握り締めて、電話をした。

「はい、龍野高校曙寮です。」

噂の寮母さんの声。以外に優しそうな声だった。

「あの、私、佐々木といいます。1年の清水くん、清水匠^{たくみ}くんをお

願います。」

「ちょっと、待っててね。」

そう言っていると電話が保留になった。

私は、マスコットを握り締めたまま、公衆電話の前に立ち尽くす。

暫くすると、聞き覚えのある、暖かい声がした。

「もしもし、佐々木つて、佐々木ゆみ？」

「うん、ごめんね。初電話しちゃった……………」

「どうしたの？こんな時間に？」

そついわれて、駅の時計を見た。夜の9時過ぎだった。

「なんかね、声が聞きたくなつてね……………」

そこまでは何とか言えたけど、その後は涙が出てきて言葉にならなかった。

「どうしたの？何があつたの？今、どこにいるの？」

私はただ、涙が止まらず、また清水くんを困らせていた。

「ねえ、今どこなの？家から？」

「違う……………駅……………」

「駅ってどこの？」

私は、涙交じりの声で寮の近くにある駅の名前を言った。

「今から行くから、そこにいて！いいねっ！動いちゃダメだよ。」

そう言うのと電話は切れた。

私は、切れた電話を耳に当てたまま、暫く涙が止まらなかった。

数分後、自転車に乗った清水くんが現れて、駅の隣にある公園のベンチで話をした。

「いったいどうしたの？何があったの？大丈夫なの？大丈夫じゃ、ここまで来ないよね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・・・」

「また、謝る！佐々木の悪い癖だよ！・・・で、いったいどうしたの？」

「こんな事で・・・・・・・・・・呼び出しちゃった・・・・・・・・・・
本当にごめんなさい・・・・・・・・・・」

「また、謝る！本気で怒るよ！」

そう言いながら、清水くんは私の肩を抱き寄せた。私は清水君の肩に頭を乗せる。

「僕は嬉しいよ。逢いに来てくれたんだし……逢いに来てくれた理由が気になるけどね。」

そう言いながらも、ずっと私の頭をなでてくれる。私の緊張の糸が切れた。

リレーメンバーに選ばれた事、その事で先輩に意地悪された事、今日の最後の捨て台詞の事。

とにかく、心の奥に溜まっていた事を一気に吐き出した感じだった。

ただ、黙って聞いてくれた清水君。相変わらず、大人だった。

「で、それで全部？この際だから、すっきりするまで話していいよ……」

「うん……」

「何？もしかして、まだあるの？」

「うん……えつとね……せつかく魔法かけてもらったのに、もうきれちゃったかも……」

「えつ？」

「電車の中でね、寝ちゃうの。夢には清水くんが出てくるの。」

「うん……」

「でね、眼が覚めて、あの冬実が撮ってくれた写真を見るのね。」

「うん・・・・・・・・・・」

「そしたら、寂しいんだけど、がんばろって思えたの。でも、今日はダメだったよ・・・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・・・」

「気がついたら、ここまで来ちゃった。しかも、誰にも内緒で・・・・・・・・」

「ええ~~~~っ！今頃心配してるんじゃないの？」

「大丈夫だよ。きつと・・・・・・・・」

「そんな事言ったって、ここから帰るのに結構時間掛かるよ！本当に大丈夫？」

「わかんない・・・・・・・・でも・・・・・・・・・・もう少し、もう少しこのままいさせて・・・・・・・・」

「僕は平気だけど・・・・・・・・明日も練習あるんでしょ？」

「ないよ。明日は試合だもん。」

「やばいじゃんっ！早く帰らないと。会場は近いの？」

「大丈夫。明日は応援だけだから、平気。明後日に走るの。」

「そっか・・・・・・・・・・」

そう言つて、暫く無言のまま、時間だけが過ぎていった。

私は、相変わらず、マスコットを握っていた。

清水くんはマスコットをそつと手に取った。

「あつ……………」

「ぼく、たつくんジュニア。ゆみちゃんは、泣き虫さんですねえっ。心配になりますねえっ。」

そつ言いながら、マスコットを動かした。

「なにそれっ???」

「がんばつて欲しいですねえっ。いつも一生懸命なゆみちゃんが
いいのにねえっ。」

「えっ？」

いつも大人な清水くんが、すごく子供っぽい。

マスコットをコミカルに動かして笑いながら話してる。

あまりにもイメージが違うから、びっくり。つい笑ってしまった。

「やっと、笑ったね。」

「えっ？」

「泣き顔のまま、さよならって帰すと心配で心配で、勉強も手につかないよ……………」

そう言いながら、清水くんは優しい笑顔を向ける。

「……………ごめんなさい……………」

「

「また謝る。でも、そろそろ帰らないと心配してるでしょ。大丈夫？」

「……………なんとか、ちょっとはがんばれるかも、うん。がんばるよっ！」

「よかった、少しは元気になったみたいだね。……………負けるなっ！ゆみ！」

そう言うと、清水くんは力強く、でも壊れ物を扱うような優しさで私を抱きしめた。

「大丈夫。ゆみには、僕がついてるから。がんばれっ！」

「……………うん。」

すごく不思議だけど、居心地がいい。嫌な事もどっかに吹っ飛んだ気分だった。

「どう？もう帰れそう？」

「……………うん。」

「ごめんね、送れないけど……………」

「いいよ。こっちこそ急にきてごめん。勉強、がんばってねっ！」

「ありがと。試合、がんばなよ！」

「……………うん。」

帰りの電車の中は、幸せな気分だった。

本当は、明日試合で走るけど、すごくパワーをもらった。

意地悪されたけど、気にしないでがんばってみよう！そう思った。

私には、マスコットの”たっくんジュニア”がついてる。

早く、お家に帰って試合の準備をしなくっちゃ。

家に帰ると、お母さんが飛んで出てきた。

どうやら、あみが心配して電話をくれたみたいで、今日の出来事と

かを話してくれてた。

とにかく、大丈夫だからと言って、部屋に逃げ込む。

急いで準備をして、ベッドにもぐりこんだ。

県予選の前の地区予選。

寝不足が原因で、個人種目は県大会には勧めなかった。

リレーではバトンがちょっと詰まったけど、何とか県大会に出場を決めれた。

これで、たまき先輩も何も言わないだろう。

これから、練習がさらに増える。

私は、あの日から強くなった気がする。

練習も前向きに出来て、記録もどんどん上がってきた。

休みがなくなるけど、私の目標、インターハイに向けてがんばらなくっちゃ。

清水くんに比べると、まだまだ子供だけど、少しは成長したと思う。

だから・・・・・・・・・・

自分に自信が持てて、結果がきちんとでたら・・・・・・・・・・

胸をはって、清水くんに逢いに行こう。

そう決心した。

少しだけの成長（後書き）

つたない文章を読んでいただき、ありがとうございます。
もし、よろしければ、今後の参考にしたいと思います。
ぜひ、ご意見、ご感想をお願いいたします。

桜の下で（前書き）

高校時代、折れかかった気持ちを繋いでくれた彼。
あれから5年が過ぎ、少し大人になった二人の関係・・・

桜の下で

私は、インターハイを目指して嶋野高校の陸上部に推薦入学をした。入学してすぐにリレーメンバーに選ばれて、先輩からいじめに逢った。

折れそうになった気持ちを、清水くんに助けてもらった。

あれから早いものでもう5年……………

1年の時は県大会の次のブロック大会まで進んだ。嶋野高校始まって以来の快挙だった。

2年の時は見事、インターハイに出場。でも、初めての出場とあって緊張しまくり。

いつもの走りが出来なくって、予選落ち。その悔しさを胸に、更に猛特訓の日々。

3年では、とうとう400mリレーで優勝、更に個人種目でも優勝できた。

優勝した事で、世間が注目をしてくれて、生活環境が少しずつ変化してきた。

周りには、実業団や各有力大学からスカウトがたくさん来ていた。

最終的に決めたのは、大学に進学する事にした。

選手生命を考えて、陸上以外の事を身につける事も選択肢の一つと思っただからだ。

清水くんも、自分の目標に向かって理工学部に進んだ。

話を聞いても、難しくってよく私には理解できない。

いつの頃からか、清水くんと連絡も携帯のメールでやり取りをするようになった。

メリットは、相手の忙しさを気にせず送れること。

デメリットは、やっぱり気持ちが少し伝わらない事。

携帯だから、電話をすれば直接彼に繋がる。

そんな安心感があった。

そして、いつの頃からか”たっくんへ”という出だしでメールを送るようになった。

彼からも”ゆみへ”という出だしでメールが来るようになった。

メールでは、いろんな事を伝えられた。

高校の頃は、陸上の試合の事が多かった。

結果は必ず報告して、遠征先の景色や、季節感を感じた事とかを送った。

もちろん、気に入った景色は画像も送った。

たつくんからは、体調を気遣ってくれたり、今の勉強の事

寮から見える季節の移ろいとかを教えてくれた。

大学に進んでからは、お互い少し時間に余裕が出て逢える時間も出来た。

逢えば、お茶を飲んだり、ご飯を食べたりと普通のカップルみたいに過ごした。

頻繁にメールをしたり電話したり……

だから離れていても、いつも近くにいてる感じがした。

そういえば、つい最近一人暮らしを始めたってメールがきてた。

私なんて、遠征にはなれたけど、一人で生活なんて絶対無理だった。

末っ子の甘えたな性格は、今でも変わらない。

お兄ちゃんが結婚して、家を出てからは完全に一人っ子状態だった。

そんな事を考えてるとメールが届いた。

「ゆみへ

風邪でダウン……………

明日は、ちょっと無理かも・・・・・・・・

せつかくのオフなのに、ごめん・・・・・・・・」

せつかく久しぶりに逢う約束をしてたのに・・・・・・・・

でも、一人で家でダウンしてるのって不安じゃないのかな？

ちゃんとご飯、食べてるのかな？

お医者さんには行けてるのかな？

メールを見てすごく心配になった。

「たつくんへ

大丈夫？

ご飯とか食べた？ お医者さんに行った？

熱とかあるの؟؟？」

「ゆみへ

熱があつて、食べてない・・・・・・・・」

返信をする代わりに、私は家を飛び出していた。

電車を乗り継いで、彼の元へ・・・・・・・・

途中、コンビニで色々買った。

初めて、彼の家に行く。

前に目印を聞いてた事と、1度車で前を通っただけ。

自分の記憶力に頼るしかない。

何とか、それらしき部屋に着き、チャイムを何度か鳴らす。

暫くの沈黙の後、ドアの奥から元氣のない声が聞こえた。

「は？いつ、誰？」

「訪問看護の者ですが・・・・・・・・」

「はっ？誰？」

明らかに、疑ってる。

それでも、ガチャガチャと鍵を開けてドアを少し開けた。

「こんばんわ・・・・・・・・」

「ゆみ・・・・・・・・」

「びつくりした？メール見たら心配になって・・・・・・・・」

今日、たまたま早く家に帰ってたから……………

……………びつくりした？」

「えっ……………う、うん……………」

あつ、汚いけどあがつて……………」

玄関から廊下がある。ちょうど廊下にキッチン、反対側にユニットバス、奥に部屋があった。

「以外に広いね……………」

部屋の中には、今まで彼が寝てたベッドとテーブル、パソコンデスクにテレビとかがあった。

「本当かよ？なんか、狭いでしょ？物がたくさんあるから……………」
「……………」

そっついながら、テーブルの上の書類や本を片付けていた。

「いいよ、寝てて……………適当に座ってるから……………」

「ごめんね……………」

でも、びつくりしたよ。突然来るから……………」

高校のときもあつたね……………あの時は泣いちゃって、更に驚いたけど……………」

「そうだねえ〜っ、あの時はいっぱい、いっぱいだったんだよ！でも、たっくんに逢って、私の快進撃が始まったんだよっ！」

「知ってるよ！じゃあ、僕にすごく感謝してもらわないとねっ。」

「だから、こうして看病に駆けつけたんだよっ！」

「えっ、本当？？？」

「うん！だって、どうせ逢うなら、少しでも早くって思ってたね・・・」

そう言って、コンビにで仕入れてきた食材を見せた。

「今、何か作るよ。一応、風邪薬も買ってきたよ。」

「ありがと、ゆみ・・・・・・・・・・」

「そう、ここで恩返しして、私も女の子ってとこ、アピールしとかないとねっ。」

言い終わるが早いか、二人で大笑いした。

雑炊をつくって一緒に食べて、定番のリンゴをデザートに出した。

「私、かたづけちゃうから、寝てていいよ。」

あっ、その前に、お薬飲まないとっ！！」

「ありがとう、でも……………」

「大丈夫！レポートまとめなきゃいけないし……………」

安心して寝てていいよ！」

そう言ってたつくんにお水を渡す。

薬を飲んで、またベッドにもぐり込んだ。

私は食器を洗って、テーブルの上を片付けレポートに取り掛かった。

どれくらい時間が経ったんだろう？

気がつくと、たつくんが起きてこつちを見つめていた。

「ごめん……………起こしちゃった？」

「いや、大丈夫。

いつもは一人でレポートまとめたり、資料作ったりしててさ……………

つい、そのまま寝入っちゃうんだよ。ふと目が覚めても誰もいないんだ……………」

・ まっ、一人暮らしだから、当たり前なんだけど……………

でも、今日は目が覚めたら、ゆみがいて……………」

なんか、ちょっと幸せ……………」

「たつくん……………」

「なんか、薬が効いたみたい。熱、下がった感じだよ！」

そう言うと、体温計で熱を計る。

「ほら、もう大丈夫！汗も一杯かいたし……………」

「ご心配をお掛けしました……………」

「本当なの？熱、下がったの？」

「うん、訪問看護が効いたよっ！」

汗だから、ちょっと着替えるね！」

「そうだっ！ついでだから、シートも換えちゃえば？」

私、交換しておくけど？」

「おっ、それは助かります……………」

たつくんは、ベッドの下からシートと着替えを取り出した。

私にシートを渡して、ユニットバスの方に消えていった。

シートを交換して、レポートに取り掛かった。

暫くすると、明らかにシャワーを浴びてすっきりしている彼が

コーヒーを片手に戻ってきた。

「まさか、シャワー浴びたの？」

「だって、ここ数日お風呂入ってなかったし……………」

熱も下がったから、大丈夫。さっぱりしたよ。

はい、どうぞ……………」

「でも……………」

また、熱が出たらどうするの？」

「大丈夫！すぐに寝ちやえば問題ないよっ！

でも、ゆみはどうする？その格好じゃ寝れないね。

そうだ、僕の着て寝る？」

また、ベッドの下からＴシャツとハーフパンツを出してくれた。

「ついでに、シャワーも使っていていいよ。

着替えはあちらでどうぞ……………」

たつくんはユニットバスを指差した。

そういえば、私も身体がべたつく…………

遠慮なく、シャワーを浴びる事にした。

シャワーを浴びて出てくると、彼の匂いに包まれた服を着て少し幸せな気分だった。

部屋に戻ると、たつくんはベッドに座って私のレポートを見ていた。

「あつ、ちょっと、恥ずかしいから見ないでっ！」

慌てて隠そうとすると、手をつかまれ、そのまま彼の腕の中に納まっていた。

「勝手に見てごめん……………今日はありがとう。」

すごい、嬉しかった……………」

突然の出来事に驚いた。

彼は、優しく私を抱きしめた。

何度もあつたはずなのに、今日はすごくこの場所が落ち着く……………

何度もしたはずなのに、今日のキスはいつもと違った。

彼の手が、優しく私をなでる。

あまりにも心地よくって、時が経つのを忘れそう・・・

彼の手が、私を大事に扱ってくれた・・・

私も愛しくって、彼に触れた。

このまま・・・

ずっと、このままいたい・・・

お互いを求め合った・・・

目が醒めると、シングルのベッドで私達は抱き合っていた・・・

「おはよう・・・」

「おはよう・・・身体、大丈夫？」

「うん・・・」

ゆみ「・・・」

「・・・はい。」

「これで、僕たち、心も身体も1つになったね・・・」

「・・・うん。」

「ゆみ・・・・・・・・・・」

大好きだよ・・・・・・・・・・」

「私も・・・・・・・・・・」

たっくんが大好き・・・・・・・・・・」

また、私達は確認しあうかのようにキスをした。

何度も、何度も、キスをした・・・・・・・・・・

窓からは朝陽が差し込んでいる。

窓の外には、桜の花が舞い散っていた・・・・・・・・・・

桜の下で（後書き）

拙い文章ですが、読んでいただきありがとうございました。
今後の参考にしたいと思います。

どんな事でも、ご意見、ご感想をお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8841d/>

桜の花の咲く頃

2010年10月27日08時00分発行